

北原・萩林遺跡

－介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2012

医療法人関越中央病院
株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

北原・萩林遺跡

— 介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2012

医療法人関越中央病院
株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

例 言

1. 本書は、医療法人関越中央病院による介護施設建設に伴い実施された、「北原・萩林遺跡」（高崎市遺跡番号 516）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在は、群馬県高崎市北原町字萩林 169-2・178-4・178-5・179・180-2・181-1 番地である。
3. 発掘調査面積は、約 290㎡である。
4. 発掘調査は、平成 23 年 7 月 11 日から平成 23 年 8 月 18 日まで実施した。
5. 発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を結んだ株式会社シン技術コンサルが実施した。
6. 調査体制は以下のとおりである。

高崎市教育委員会	株式会社シン技術コンサル
田口一郎	調査担当 吉澤 学
滝沢 匡	測量担当 志村将直
須田奈保子	成田厳人
7. 本書の編集は吉澤・坂本勝一（株式会社シン技術コンサル）が行った。執筆は第 I 章を田口、他を吉澤が行った。
8. 本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に従事した作業員は以下の通りである。（敬称略・五十音順）

阿部加平、岡田広志、岡田 勝、串渕春江、斉藤昭夫、佐藤貞夫、高橋孝子、星沢綾香、星野芳彦、森下綾子、山田友子、山本芳子
10. 発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（敬称略）

医療法人関越中央病院、山下工業株式会社、細谷印刷有限会社

凡 例

1. 本書掲載図に使用した地図は、第 1 図が平成 2・10 年・国土地理院発行 1/50,000 地形図『榛名山』・『前橋』、第 2 図が昭和 7 (1932) 年・大日本帝国陸地測量部発行 1/25,000 地形図『前橋』、第 3 図が平成 14・22 年・国土地理院発行 1/25,000 地形図『渋川』・『前橋』である。
2. 遺構配置図の座標については、世界測地系に基づく平面直角座標第 IX 系を使用した。また、遺構平面図に示した方位は、座標北である。
3. 遺構図中におけるトーン  は焼土範囲を、遺物図中におけるトーン  は煤範囲を示している。
4. 土層の色調は『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所色票監修 2002 版）による。
5. 火山噴出物の表記は略号を用いた。浅間 A 軽石 = As-A、浅間 B テフラ = As-B、浅間 C 軽石 = As-C、浅間黄色軽石 = As-YP である。
6. 遺構の略号は、竪穴住居跡 = S I、土坑 = S K、溝跡 = S D、ピット = Pit とした。
7. 本書掲載の遺物 No は挿図・観察表・写真図版全て統一しており、掲載縮尺も挿図・写真図版ともに 1/3 を基本としているが、これと異なるものについては個別に縮尺を付してある。

目 次

例 言

凡 例

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 調査の方法と経過	2
第 III 章 遺跡の立地と環境	4
第 1 節 地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	5
第 IV 章 基本層序	9
第 V 章 検出された遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡 (SI)	10
(2) 土坑 (SK)	23
(3) 溝跡 (SD)	24
(4) ピット (Pit)	25
(5) 遺構外出土遺物	25
第 VI 章 まとめ	28
第 1 節 住居跡出土土器について	28
第 2 節 北原・萩林遺跡の集落について	30

写真図版

抄 録

挿図目次

第 1 図 北原・萩林遺跡位置図	1	第14図 SI3 遺構図- 2	19
第 2 図 北原・萩林遺跡遺構配置図	3	第15図 SI4 遺構図- 1	20
第 3 図 1929 (昭和 4) 年の遺跡地周辺	4	第16図 SI4 遺構図- 2	21
第 4 図 周辺遺跡分布図	6	第17図 SI4 出土遺物実測図	22
第 5 図 基本層序図	9	第18図 SK1 ~ 5 遺構図・SK2 出土遺物実測図	23
第 6 図 SI1 遺構図	11	第19図 SK6 ~ 10 遺構図	24
第 7 図 SI1 出土遺物実測図	12	第20図 SD1 遺構図	24
第 8 図 SI2 遺構図-1	13	第21図 Pit1 ~ 4 遺構図	25
第 9 図 SI2 遺構図-2・出土遺物実測図-1	14	第22図 遺構外出土遺物実測図	25
第10図 SI2 出土遺物実測図-2	15	第23図 土師器坏集成図	28
第11図 SI2 出土遺物実測図-3	16	第24図 須恵器坏・坏蓋・高坏集成図	29
第12図 SI3 出土遺物実測図	17	第25図 周辺の 7 世紀後葉～ 8 世紀初頭の住居跡	31
第13図 SI3 遺構図- 1	18	第26図 周辺遺跡の仏鉢と佐波理碗	32

表目次

第 1 表 周辺遺跡一覧表	7	第 6 表 SK 観察表	23
第 2 表 SI1 柱穴観察表	11	第 7 表 Pit 観察表	25
第 3 表 SI2 土坑観察表	14	第 8 表 北原・萩林遺跡出土物観察表- 1	26
第 4 表 SI3 土坑観察表	18	第 9 表 北原・萩林遺跡出土物観察表- 2	27
第 5 表 SI4 柱穴・土坑観察表	21		

写真目次

PL.1 調査前現況・同遠景・調査区 全景・基本土層	PL.4 SI4	PL.7 出土遺物- SI1・2 (1)
PL.2 SI1, SI2 (1)	PL.5 SK1 ~ 8	PL.8 出土遺物- SI2 (2)・3・4 (1)
PL.3 SI2 (2), SI3	PL.6 SK9・10, SD1, Pit1 ~ 4	PL.9 出土遺物- SI4 (2), SK2, 遺構外

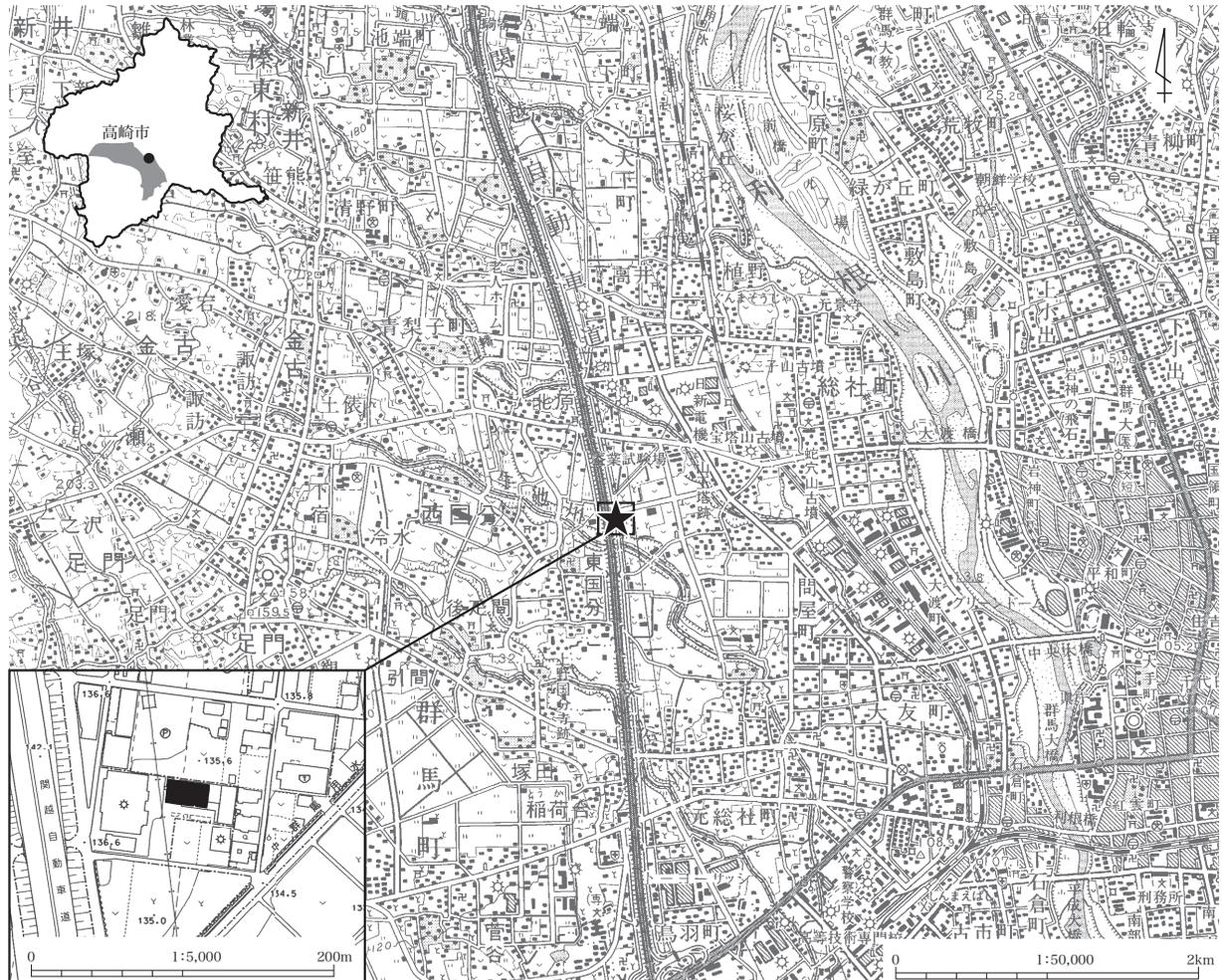
第 I 章 調査に至る経緯

平成22年7月、新進物産株式会社(以下事業者)より高崎市教育委員会(以下市教委)に特別養護老人ホーム予定地内の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地の西側隣接地で関越自動車道建設に伴う北原遺跡・国分境遺跡において、古墳～平安時代の集落遺跡や古墳時代の水田遺構等が調査されており、周辺地域にも広がる可能性が大きいと、試掘調査による確認を行うことと、その結果による工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年8月10日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年9月14・15日に工事予定地の試掘調査を実施し、駐車場として利用されていた部分を中心に古墳時代の竪穴住居跡と推定される遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行なった。その間、事業主が医療法人関越中央病院へ変更があり、建物設計の変更もあった。最終的な建設計画に基づく協議により、老人ホーム建設部分で遺構が残存する範囲の記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社シン技術コンサルに委託して実施することとなり、平成23年6月27日付けで高崎市長・関越中央病院・シン技術コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成23年6月27日付けで関越中央病院とシン技術コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図 北原・萩林遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の調査は介護施設建物部分のうち、試掘調査で遺構の存在が確認された約440㎡を当初の調査範囲に設定していた。しかし表土除去の結果、調査区内の中央部付近が広範囲で攪乱されていることが判明したため、最終的にこれを除く約290㎡を調査対象とした。この攪乱部分についてはあらかじめ重機で掘削を任意の深さまで行い、遺構の有無を確認した上で排土によって埋め戻した。

調査地の現況は、人の背丈程のアカザ・ヨモギなどが生い茂る雑草地であったため、作業はその伐採から開始した。表土除去についてはバックホウを用い、攪乱の掘削も同時に行った。この時点で生じた排土はダンプで調査区の南西側に移動し、敷地内に仮置きした。遺構が構築されている黒褐色土(As-C混土層)検出後は、まずジョレンおよびスコップで層上面の精査と、重機での掘削が不可能な小規模な攪乱を人力で掘削し、平面と断面の両方から遺構確認を行った。これにより検出された遺構は、移植ゴテ等で掘削、調査した。なお、表土除去から遺構掘削までの作業は基本的に東側から着手し、西側へと進めていった。また、全ての遺構調査が終了した段階でラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施し、調査区全体の撮影を行った。

作図作業は断面図を手実測、平面図をトータルステーションによる器械実測で行った。遺物微細図などについてはデジタルカメラによる写真図化も併用し、これらの取得データはいずれも最終的にコンピュータ上で処理・編集した。

写真記録については35mmカメラによる撮影を基本とし、フィルムはモノクロネガ・カラーリバーサルの2種類を使用した。また、デジタルカメラによる補助的な撮影も併せて行った。ラジコンヘリコプターによる空中撮影には、6×6判カメラを用い、フィルムはモノクロネガ・同カラーリバーサルフィルムを使用した。なお、空中撮影においてもデジタルカメラでの補助撮影を実施している。

調査の経過は、下記の通りである。

平成23年

- 7月11日 仮設トイレ・調査器材搬入。テント設置。雑草伐採作業。
- 7月12日 表土除去開始。調査区外周安全柵設置。東部遺構確認。
- 7月13～15日 中央部遺構確認。SI1・2、SK1～6、SD1、Pit1調査。14日表土除去終了。
- 7月19・20日 19日に台風対策の養生作業実施。20日作業休止。
- 7月21・22日 西部遺構確認。SI1～3、SD1、SK7調査。
- 7月25～29日 SI2～4調査。SI1、SK1～7、SD1、Pit1平面計測。29日雨天のため作業休止。
- 8月1～3日 SI3・4、SK8・9、Pit2・3調査。SI2・3、SK8・9、Pit2・3平面計測。トレンチ1掘削・断面計測。
- 8月4日 工程調整のため作業休止。
- 8月5日 SI4、SK10、Pit4調査。基本土層テストピット掘削。
- 8月8・9日 SI4、SK10、Pit4平面計測。基本土層テストピット断面計測。空撮準備(清掃作業等)。
- 8月10日 空撮実施。一部遺構埋め戻し(安全対策)。調査器材整理。
- 8月11日 調査器材搬出。
- 8月12～16日 お盆期間のため作業休止。
- 8月17日 埋め戻し。安全柵撤去。テント解体・搬出。
- 8月18日 埋め戻し終了。仮設トイレ搬出。調査終了。



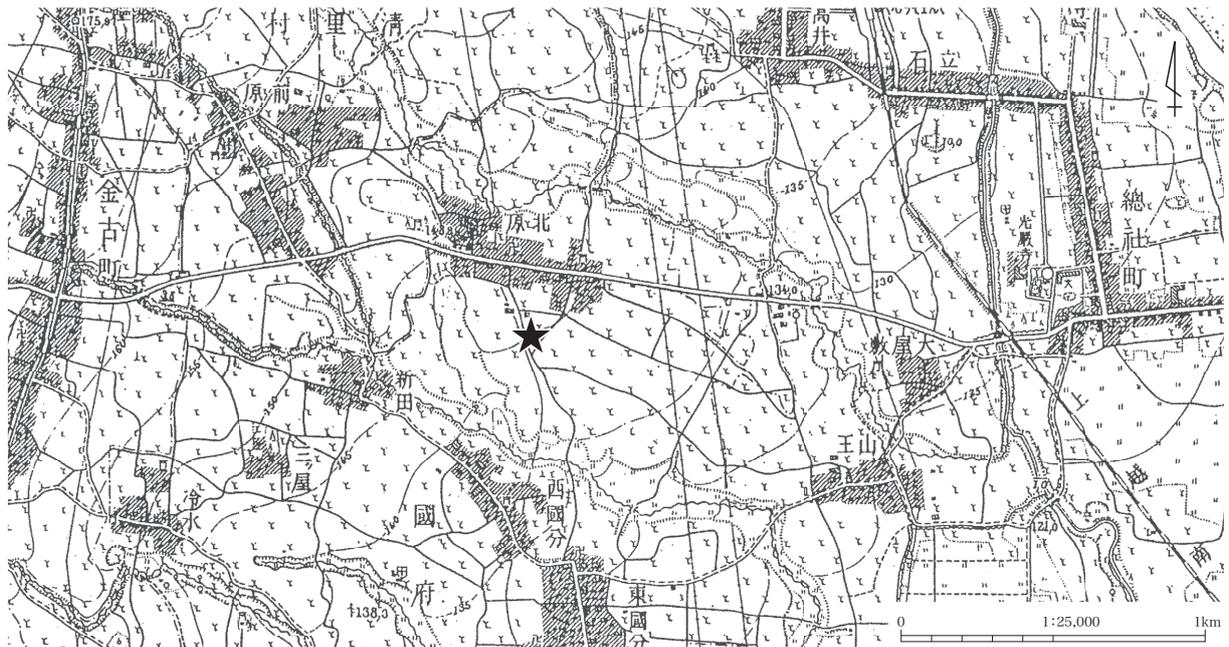
第2図 北原・萩林遺跡遺構配置図

第Ⅲ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高崎市は総面積約459.41km²の群馬県の中核市で、群馬県の南西部をほぼ横断するかたちで位置している。西端は長野県北佐久郡軽井沢町、東端は埼玉県児玉郡上里町に接しており、概観して西端の鼻曲山を水源とする烏川により東西に分断された地勢を呈す。かかる烏川は南東方向へと流下しながら中流域で碓氷川、下流域で鐮川・井野川等の支流を集めて玉村町東端へと至り、ここで最終的に利根川へと合流する。市域の西側一帯は山地および丘陵地が大半を占め、相対して東側平野部の烏川右岸には洪積台地である前橋台地が広がっている。前橋台地の基盤は約2～2.4万年前の浅間山体崩壊を給源とする前橋泥流堆積物であり、これが榛名・浅間山等の火山噴出物に被覆され、現況地形の外殻を成している。この中で井野川～烏川間の地帯は特に「高崎台地」と呼ばれることもあり、前橋台地を数メートル以上の厚さで高崎泥流堆積物が覆って現況の地形を成しているが、その形成時期については未詳である。

本遺跡が所在する北原町は高崎市の北東端部、旧群馬町域に含まれ、前橋市との境界地の一つである。榛名山南東麓に形成された相馬ヶ原扇状地と前橋台地との移行地帯に属し、標高135～145m前後の南東面する緩傾斜地に位置する。地形の基盤を成す相馬ヶ原扇状地は、標高600m付近を扇頂とする砂礫主体の裾野扇状地で、扇端とされる標高110mの等高線上では8km程度の広がりをもつ。その形成は約1.4万年前の榛名山体崩落時の岩屑なだれを発端に、As-YP 降下(約1.3万～1.4万年前)までの比較的短期間で現形に至ったと考えられている。その後地形面には中小河川による放射谷が幾筋も刻まれるが、その浸食はいずれも扇端付近で弱まって幅広かつ浅い谷へと変化し、帯状の低台地が連続する地形を削出している。本遺跡もその一つ、南を牛池川・北を八幡川に挟まれた幅650～800m前後の台地先端付近に立地している。かつては桑や野菜を中心とした畑作地帯であったが、年々宅地化が進行し、さらに東側には前橋工業団地をはじめ商工業地としての街並みが揃うなど、市街化傾向が一時的に加速してその余韻が今も尚残る地域といえる。



第3図 1929(昭和4)年の遺跡地周辺

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺では昭和50年代から、関越自動車道(新潟線)をはじめとする幹線道路新設や区画整理などの大規模事業が相次いでいる。伴う発掘調査も多々実施され、その成果は地域的な歴史像解明に繋がる有効な資料としての蓄積をみせている。雑駁ではあるが本遺跡周辺の歴史的環境について、これら既調査遺跡からの情報をふまえ、以下にまとめてみる。

旧石器時代

当該期の遺跡は周辺地では全く知られていない。前述したように相馬ヶ原扇状地は1万3千～1万4千年前に形成されたのであり、続く河川浸食による放射谷の形成、あるいはその流域の段丘化など、不安定な地形変遷が人々の生活の障りになっていたのであろう。

縄文時代

最も遡る段階では、早期の遺物が上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群(第4図-5・以降「中間地域遺跡群」と略記)、熊野谷遺跡(24)、稲荷塚道東遺跡(43)などで報告されている。しかしいずれも断片的な資料に留まり、併せて地域内での出土頻度なども鑑みれば人々の進退は消極的であるといえ、当該期の自然環境も生活に不適な状況にあったことが窺える。

前期でも後半(諸磯期)に入ると、散発的に居住の痕跡が辿れるようになる。長久保大畑遺跡(13)や高井桃ノ木遺跡(15)、清里・長久保遺跡(16)、下東西清水遺跡(21)では包含層や遺構覆土内に混在して遺物が出土しており、近隣にその流出源となる集落等の存在を想定させる。実際に中間地域遺跡群で1軒、元総社蒼海遺跡群(47)で4軒の諸磯C期住居跡が検出されており、この段階でようやく生活域としての条件が揃いつつあったことを暗示している。

続く中期には、各所で集落の出現をみるようになる。特に後半期(加曾利E期)には一つの画期を迎えたようであり、中間地域遺跡群、清里・長久保遺跡、熊野谷遺跡、大屋敷遺跡(34)、産業道路東遺跡(41)、元総社蒼海遺跡群をはじめ10ヶ所以上もの集落遺跡や包蔵地が知られている。集落の発達には染谷川左岸域に顕著であり、当該期最大規模とされる中間地域遺跡群の集落もここに立地する。また、長久保大畑遺跡では多数の配石遺構や集石が群在して検出されており、やはり周辺に相当規模の集落を想定し得る。

後期は、中期と比べ衰退期ともいえる状況で、清里・長久保遺跡、鳥羽遺跡(6)、産業道路西遺跡(42)の各1軒の住居跡など、遺構の検出率が極端に減少する。なお、晩期の遺構は今のところ例をみない。

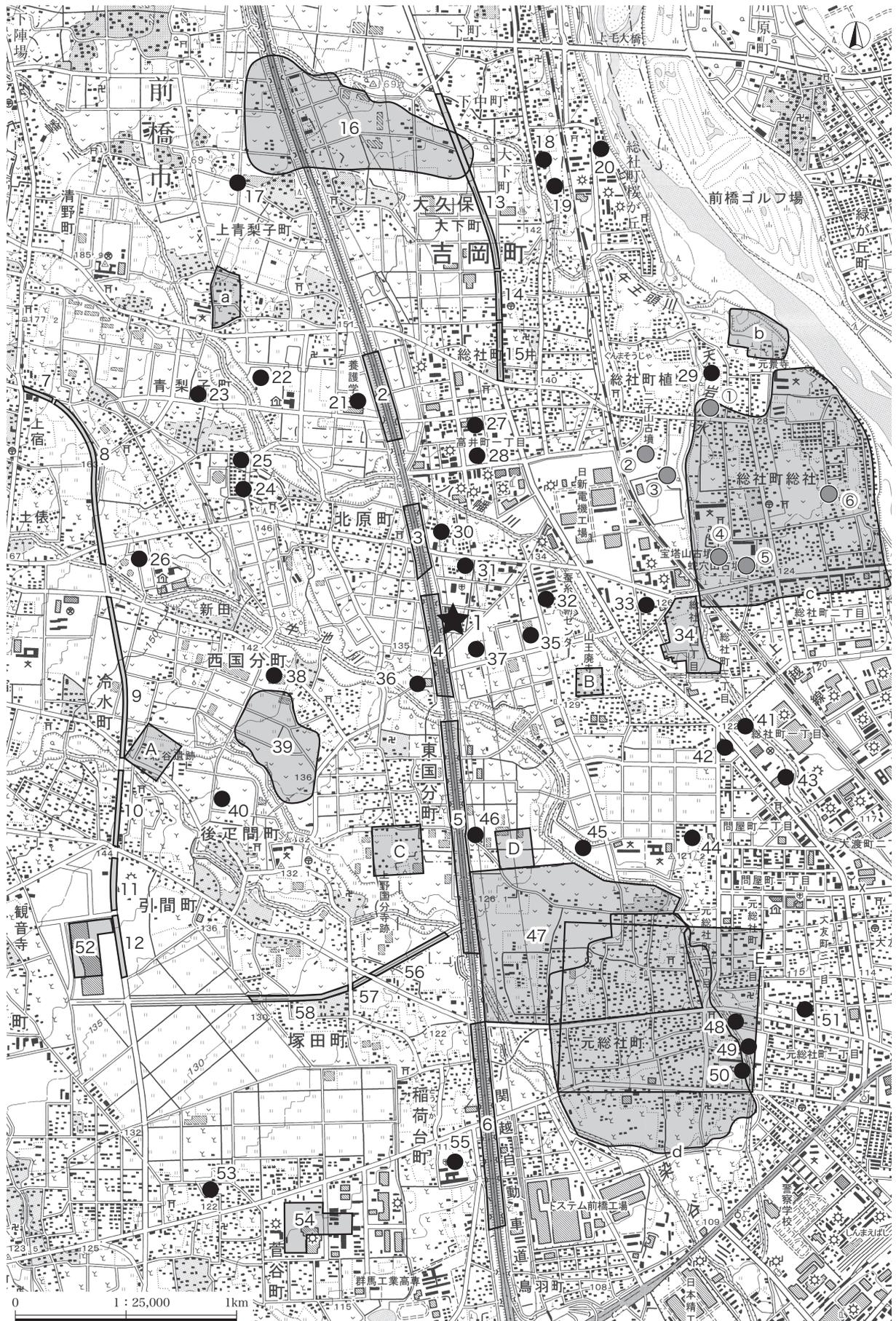
弥生時代

初頭に位置付けられる、西三社免遺跡(12)の沖式土器の破片資料が最古例である。前期に至っても北原遺跡(3)の須和田式土器など遺物の出土が若干例知られるのみであり、遺構の報告例は皆無である。

中期に入ると集落の形成が開始されるものの、概観して散居的な状況であり、後期以降もこの傾向は続く。しかしながら清里・庚申塚遺跡(17)で検出された中期後半(竜見町期)の環濠集落や、中間地域遺跡群の後期前半(樽期)の方形周溝墓の存在などが組織的な土地開発の萌芽を物語っており、さらに元総社寺田遺跡(50)では3軒の後期住居跡が末期以前のAs-C埋没水田跡に近接し、当時の生活基盤たる水田経営がこの時期に遡って始動した可能性を示唆している。

古墳時代

初頭～前期の集落は、中間地域遺跡群、鳥羽遺跡、西三社免遺跡、長久保大畑遺跡、膏薬遺跡(28)、稲荷塚道東遺跡(43)、元総社西川遺跡(56)などが知られる。このうち中間地域遺跡群の集落は住居跡25軒・方形周溝墓1基とやや優位性をもつようだが、地域全体としては小集落が散在するのが普遍的であり、社会的にも未成熟な状況が垣間見える。



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	文献
1	北原・萩林遺跡	本書所収	
2	下東西遺跡	縄文前期土坑/弥生~平安集落/中世堅穴状遺構・井戸	群埋文1987『下東西遺跡』
3	北原遺跡	古墳後期水田/奈良・平安集落/中世溝	群馬町教委1986『北原遺跡』
4	国分境遺跡	古墳終末期~平安集落	群埋文1990『国分境遺跡』
5	上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡群	縄文中期・弥生~古墳前期・後期~中世集落	群埋文1986~92『上野国分僧寺・尼寺中間地域』(1)~(7)
6	鳥羽遺跡	古墳~平安集落/奈良鍛冶工房・神社遺構/中世屋敷	群埋文1986・88・90・92『鳥羽遺跡』
7	青梨子上屋敷遺跡	奈良堅穴住居/中世屋敷/近世以降土坑・溝	群埋文2003『青梨子上屋敷遺跡・金古北十三町遺跡II』
8	金古北十三町遺跡	古墳FA下水田・畠/奈良~平安集落/中~近世屋敷・道路	群埋文1998『冷水村東遺跡・西国分遺跡・金古北十三町遺跡』
9	冷水村東・西国分新田遺跡	古墳後期・奈良~平安集落/FA下水田・畠/B下水田	
10	諏訪西遺跡	古墳中期・奈良~平安集落/FA下畠//中~近世土坑・溝	群馬町教委1995『諏訪西遺跡』
11	小池遺跡	古墳後期~平安集落/FA下畠	群馬町教委1992『小池遺跡』
12	西三社免遺跡	古墳前期~平安集落	群馬町教委1990『西三社免遺跡』
13	長久保大畑遺跡	縄文中期配石/古墳前期~平安集落/FA・B下水田/中世屋敷	群埋文2000『長久保大畑遺跡・新田入口遺跡』
14	大久保新田入口遺跡	縄文中期墓墳/古墳畠/奈良~平安集落/中世水路	
15	高井桃ノ木I~III遺跡	縄文前~中期包含層/古墳後期~平安集落/中世畠・土坑	大友町西通線遺跡調査会1999『高井桃ノ木遺跡』他
16	清里・長久保遺跡	縄文中期集落/古墳群(後期~終末期)/平安堅穴住居・墓墳	群埋文1986『清里・長久保遺跡』
17	清里・庚申塚遺跡	弥生中期環壕集落/古墳群(終末期)/平安堅穴住居	群埋文1982『清里・庚申塚遺跡』
18	天下遺跡	縄文土坑群/奈良集落/B下水道遺構	吉岡町教委1993『天下遺跡』
19	西久保遺跡	平安集落	前橋市調査団1993『西久保遺跡』
20	総社桜ヶ丘遺跡	奈良~平安集落/中~近世畠・溝	前橋市調査団1985『総社桜ヶ丘遺跡』
21	下東西清水上遺跡	奈良~平安集落/中~近世屋敷・墓墳	群埋文1998『下東西清水上遺跡』
22	中島遺跡	奈良~平安集落	前橋市教委1981『中島遺跡』
23	松ノ木遺跡	平安集落/近世土坑	前橋市教委1981『清里南部遺跡群III』
24	熊野谷遺跡	縄文中~後期集落/平安集落	前橋市調査団1989『熊野谷遺跡』
25	熊野谷II・III遺跡	平安集落	前橋市調査団1991『熊野谷II・III遺跡』
26	青梨子金古境遺跡	FA下畠/平安集落	県央第一水道遺跡調査会1995『青梨子金古境遺跡』
27	柿木遺跡	奈良~平安集落/中~近世土坑	前橋市教委1984『柿木遺跡』
28	膏葉遺跡	古墳前期堅穴住居	前橋市教委1988『膏葉遺跡』
29	若宮遺跡	奈良~平安集落	前橋市調査団1989『若宮遺跡』
30	北原北下り遺跡	平安堅穴住居	群馬町教委1995『町内遺跡III』
31	北原村東遺跡	平安堅穴住居・溝	群馬町教委2004『北原村東遺跡・中泉稲荷前遺跡』
32	総社観音沢遺跡	平安集落	総社観音沢遺跡調査会1997『総社観音沢遺跡』
33	村東遺跡	奈良~平安集落/中世堀	前橋市調査団1987『村東遺跡』
34	大屋敷遺跡I~IV	縄文中期・古墳後期~平安集落/中世屋敷	前橋市調査団1993~96『大屋敷遺跡』I~IV
35	国分境II遺跡	古墳終末期~奈良集落	前橋市教委1991『国分境II遺跡』
36	国分境III遺跡	古墳終末期~平安集落	群馬町教委1993『国分境III遺跡』
37	国分境IV遺跡	平安集落	群馬町教委1996『町内遺跡IV』
38	西国分六ツ割遺跡	古墳後期畠/奈良集落/近世土坑	
39	西国分遺跡群	古墳中期~平安集落/FA下畠/中世墓墳	群馬町教委1989『西国分I遺跡』・他
40	後疋間遺跡群	古墳中期~平安集落/平安小鍛冶/中世井戸	群馬町教委1986『後疋間I遺跡』・他
41	産業道路東遺跡	縄文中期堅穴住居	
42	産業道路西遺跡	縄文後期堅穴住居	前橋市1971『前橋市史』第1巻
43	稲荷塚道東遺跡	古墳前期~平安集落/平安カマド材採掘痕群	群埋文2003『稲荷塚道東遺跡』
44	総社甲稲荷塚大道西遺跡	奈良~平安集落/中世畠/近世溝	前橋市調査団2002『総社甲稲荷塚大道西遺跡他』
45	元総社北川遺跡	古墳前期水路/FA下水田/FA混土畠/B混土水田	群埋文2007『元総社北川遺跡他』
46	東国分業師道南遺跡	平安集落	高崎市教委2008『東国分業師道南遺跡』
47	元総社蒼海遺跡群	縄文前・中期・古墳後期~平安集落/中世城・墓墳	前橋市調査団2006~11『元総社蒼海遺跡群』(1)~(34)
48	大友屋敷II・III遺跡	古墳後期・平安集落/中世地下式土坑・井戸1987	前橋市調査団1987『大友屋敷II遺跡』・他
49	元総社明神遺跡I~XIII	古墳後期~平安集落/FA・B下水田/中世城	前橋市教委・調査団1983・84・86~94『元総社明神遺跡』I~XIII
50	元総社寺田遺跡I~III	縄文~弥生包含層/C・FA下水田/中世城/近世屋敷	群埋文1993・94・96『元総社寺田遺跡』I~III
51	堰越遺跡	奈良~平安集落	山武考古学研究所1988『堰越遺跡』
52	棟高水窪II・棟高辻の内IV遺跡	古墳後期~平安集落・畠/中世溝	高崎市教委2008『棟高水窪II・棟高辻の内IV遺跡』
53	菅谷万年貝戸遺跡	平安集落	高崎市教委2007『菅谷万年貝戸遺跡』
54	菅谷・村東遺跡	奈良~平安集落・道路状遺構/中世屋敷・道路状遺構	高崎市教委2011『菅谷・村東遺跡』『菅谷・村東遺跡4』
55	稲荷台・北金尾遺跡	縄文前・中期土坑/C下畠/奈良~中世集落	高崎市教委2010『稲荷台・北金尾遺跡』
56	元総社西川・塚田中原遺跡	奈良~平安集落/FA・B下畠/中~近世屋敷	群埋文2003『元総社西川・塚田中原遺跡』
57	塚田村東IV・塚田中原・引間松葉遺跡	奈良~平安集落/FA下・B混土畠/中世屋敷・墓墳	群埋文2005『塚田村東IV遺跡・塚田中原遺跡・引間松葉遺跡』
58	棟高辻久保・引間六石・塚田の場・引間松葉遺跡	古墳後期~平安集落/FA下・B混土畠/中世道路遺構	群埋文2007『引間六石遺跡・引間松葉遺跡・塚田の場遺跡・塚田中原遺跡』
①	稲荷山古墳	90m級前方後円墳?/角安混用乱石石室/6C末	前橋市教委1988『稲荷山古墳』
②	総社二子山古墳	約90m前方後円墳/石室2(角安削石・輝安乱石)/6C後	日本古文化研究所1937『日本古文化研究所報告』4・他
③	愛宕山古墳	約56m方墳/角安混用乱石石室・家形石棺/7C前	前橋市調査団1996『総社愛宕山遺跡』・他
④	宝塔山古墳	約60m方墳/截石石室・家形石棺/7C後	
⑤	蛇穴山古墳	約43m方墳/截石石室/7C末	群馬県1981『群馬県史』資料編3・他
⑥	遠見山古墳	約70m前方後円墳/堅穴系?/5C後	前橋市教委1992『平成3年度市内遺跡発掘調査報告書』
A	北谷遺跡	豪族館/5C後~6C初	群馬町教委2005『北谷遺跡』
B	山王廃寺跡	金堂基壇・講堂版築・回廊礎石・塔心礎・根巻石/7C後創建	前橋市教委1976『山王廃寺跡発掘調査概報』・他
C	上野国分僧寺跡	金堂基壇・塔基壇・講堂礎石・築垣/8C中創建	群馬県教委1989『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』・他
D	上野国分尼寺跡	金堂基壇・講堂礎石・中門基壇/8C中創建	群馬県教委1970・71『上野国分尼寺跡調査報告書』・他
E	上野国府跡推定域	古代官衙/東・北辺区画堀	前橋市教委1968『上野国府跡発掘調査概報』・他
a	青梨子砦跡	縄張消失/16C?	
b	勝山城跡	縄張大半消失(利根川浸食)/堀/14C	山崎一1971『群馬県古城址の研究』上巻
c	総社城跡	縄張東半部消失(利根川浸食)/堀・土居/17C初	前橋市1971『前橋市史』第1巻
d	蒼海城跡	縄張消失堀・土居・櫓台/15C?	群馬県教委1989『群馬県の中世城館』

※文献の略記例：群埋文=財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団/教委=教育委員会/調査団=埋蔵文化財発掘調査団

中期～後期初頭の段階においても、下東西遺跡や諏訪西遺跡(10)、西国分遺跡群(39)、後疋間遺跡群(40)、稲荷塚道東遺跡など、実際の調査例を見る限りでは集落の発達に大きな変化は認め難い。しかし一方で5世紀後葉に比定される北谷遺跡(A)の豪族居館、さらに並行して著名な総社古墳群中の初出前方後円墳である70m級の遠見山古墳(⑥)が成立しており、地域的伸長を遂げた相応の勢力基盤の定着、言わば盟主の台頭をこれらが物語っている。6世紀初頭のHr-FA災害による疲弊も少なからずあったはずだが、この地域統合への胎動は委縮することなく、むしろ6世紀後葉以降における集落拡大とその増大へと結実するようである。事例として当該期の新規集落遺跡は冷水村東・西国分新田遺跡(9)、小池遺跡(11)、大屋敷遺跡(34)など、ほか第1表に割愛した遺跡も含めると多数におよび、このような組織的ともいえる地域開発の進展が、当地域の勢力的な隆盛を確固たるものにしたことは想像に難くない。その証左として総社古墳群の動向をみれば、6世紀後葉における90m級前方後円墳の総社二子山古墳(②)成立以降、終末期(7世紀代)の愛宕山古墳(③)、宝塔山古墳(④)、蛇穴山古墳(⑤)といった大型方墳の継起的な築造は本県唯一例であり、7世紀後葉には県内最古の伽藍寺院とされる山王廃寺(B)も創建されるなど、古墳時代が終息に向かう7世紀代には、次の律令制下における「上野国」の母体がここに形成されていたと認識できるのである。

奈良・平安時代

いわゆる「律令制」が施行され、総社古墳群勢力の広域統合を基盤として上野国府(E)が成立する。上野国府については核心部の判明には未だ至らずだが、元総社明神遺跡(49)などからその外縁を区切るとみられる堀割りの跡が発見されている。これらが仮に国府の境界を示すなら東限および北限が設定でき、8～9町(約860～980m)四方の兆域が復元可能となる。さらにこの国府外縁には従属集落も計画的に配置されることになり、現在の中核都市さながらの盛況を鑑みることができる。古墳時代からの継続的な集落もあれば新規開発とみられる集落もあり、後者の調査例では北原遺跡、金古北十三町遺跡(8)、総社桜ヶ丘遺跡(20)、下東西清水遺跡(21)、中島遺跡(22)、総社甲稲荷塚大道西遺跡(44)、堰越遺跡(51)、菅谷・村東遺跡(54)、稲荷台・北金尾遺跡(55)、元総社西川・塚田中原遺跡(56)、塚田村東IV・塚田中原・引間松葉遺跡(57)等枚挙にいとまがなく、周辺地の随所が相次いで集落化を果たしたと理解できる。加えて741(天平13)年には「国分寺建立の詔」が発令され、上野国府近辺にも上野国分僧寺(C)および国分尼寺(D)が創建される。これらと直接関連するのか、中間地域遺跡群など仏教系の遺物を出土する集落も間々確認できる。そのほか鳥羽遺跡では、奈良時代の鍛冶工房や神社の可能性のある区画遺構なども検出されており、上野国府を取り巻く集落の中でもその特異性が注視される場所である。

このような情勢の中、生活基盤となる当地域の水稲耕作は、地形的な制約もあり中小河川開析の谷合地を中心に展開された。北原遺跡、冷水村東・西国分新田遺跡、長久保大畑遺跡、元総社北川遺跡(45)、元総社明神遺跡、元総社寺田遺跡などではAs-C、さらにHr-FAやAs-Bなどに被覆された水田跡が検出されている。古墳時代前期、ともすれば弥生時代後期からの継続的な土地利用が考えられ、限定された湿地帯を合理的に開墾して利用する様が各期に亘って見て取れる。

中世以降

室町時代に蒼海城(d)が築城され、永享元(1429)年の修築を経て上野守護代長尾氏の拠点となった。県内でも最古級の城郭に数えられ、縄張りには上野国府跡の大半を取り込むかたちだが、その実態は不明点が多い。元総社蒼海遺跡群や元総社寺田遺跡などで堀割りの一部が調査されている。同城は永禄10(1567)年の武田氏侵攻によって落城し、さらに慶長6(1601)年秋元氏が総社城(C)を築城・入封したことで廃城となった。また、周辺には環濠屋敷も散見され、鳥羽遺跡、金古北十三遺跡、長久保大畑遺跡、下東西清水遺跡、大屋敷遺跡などの調査例が知られる。こういった屋敷の造営を可とした、国人級の有力当主が多数拮抗する地であったことが窺えるであろう。

第IV章 基本層序

調査地はつい最近まで工場敷地内となっており、その造成に伴うとみられる盛土が調査区内を厚く覆っていた。調査区内に多数掘り込まれた攪乱もこの時期のものと考えられ、遺構検出面上位に存在したはずの堆積層は殆どが失われている状況であった。よって基本層序の観察は、北西と南東の一部の壁面のみで実施した。観察に際してはいわゆるハードロームの下位まで試掘坑を掘削し、遺構検出面下の状況も併せて記録するようにつとめた。以下、その結果を記す。

第I層：調査区全体を覆う現代の造成土(盛土)である。建築廃材や碎石、砂礫などで形成される。

第II層：土地改良以前の耕作土とみられ、いわゆるAs-B混土の層相を呈す。3層に細別され、部分的にAs-Aとみられる大粒の軽石が含まれる。深耕のためか、調査区の西部ではIII層中にもこの層土が不規則に混じっている。

第III層：いわゆるAs-C混土である。色調はいずれも黒色系統であり、As-Cの含有量や締りなどから3層に細別される。この上面が今回の遺構検出面である。

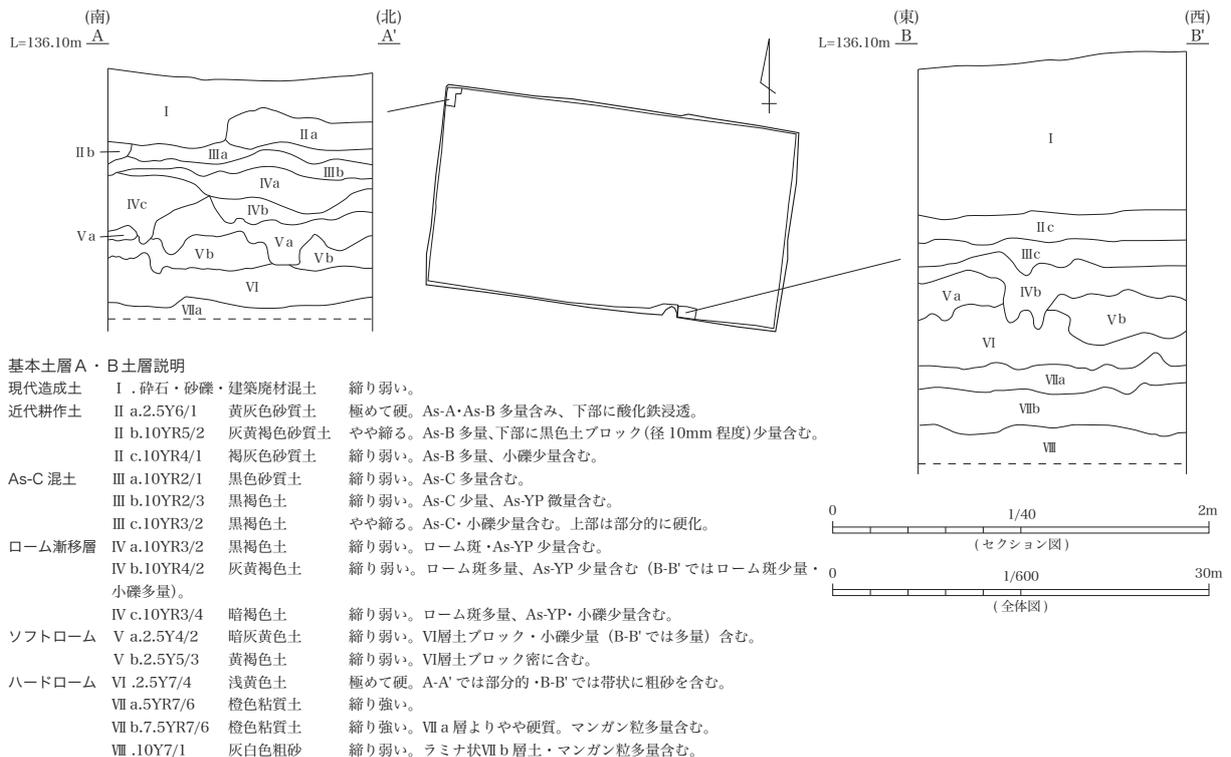
第IV層：ローム漸移層。少量ながらもAs-YPが含まれる。3層に細別される。いわゆる淡色黒ボク土に相当するものと考えられる。

第V層：ソフトローム層。2層に細別されるが、植物による影響だろうか、攪拌土状を呈している。

第VI層：ハードローム層。帯状、あるいは部分的に粗砂を含む。この粗砂はVIII層に近似しており、再堆積の可能性はある。

第VII層：粘土質ローム層。層質から水成堆積と考えられる。2層に細別され、下層にはマンガン粒が多く含まれている。

第VIII層：粗砂層であるが、風化した凝灰岩層と考えられる。相馬ヶ原扇状地の直接的な成因となった、岩屑なだれに由来するものと思われる。



第5図 基本層序図

第V章 検出された遺構と遺物

今回の調査における遺構は、竪穴住居跡(SI) 4軒、土坑(SK) 10基、溝跡(SD) 1条、ピット(Pit) 4基である。一部の土坑・ピットには自然遺構とみられるものも混在するが、概ね竪穴住居跡を中心とする集落遺跡として理解できる。遺構密度は決して濃いものではなく、また住居跡同士の重複もない。さらにこれらの住居跡は出土遺物の特徴からそれぞれ近い時期の構築であると捉えられ、一部の土坑にも併行性を考え得るものがある。こういった遺構の有り方には、一定の期間に限定された土地利用の具体的な状況が表出されていると考えられるであろう。

(1) 竪穴住居跡(SI)

SI1 (第6・7図 第2・8表 PL.2・7)

位置・残存 調査区北東隅部にて検出された。大半が調査区外にあり、南西部のみの検出である。

形状・規模 各辺の検出部の状況から、方形基調であると推測される。検出された規模は東西2.45m程、南北3.50m程である。カマドの付設を東辺に想定すれば、その方位はN-65°-Eとなる。

覆土 床面上の堆積土は5層に大別され、このうち第1・3・4層がそれぞれ層相や堆積状況などから2層ずつに細別される。いずれも自然堆積とみられ、特にAs-Cの混入が目立って認められる。第1・2層は後述するSI2～4のいずれにも類似土が観察され、埋没の近時性を示している。

壁・壁周溝 壁は若干開き気味に立ち上がり、最大高は30cm程を測る。壁周溝は検出壁の全体に認められたが、西壁では40～50cm前後内側にもう1条が巡り、壁の拡張を示している。計測値は壁際のもものが幅18～32cm、深さ3～8cm、内側のもものが幅14～27cm、深さ2～8cmで、全体的に浅い傾向がある。

床面・掘り方 床面はほぼ平坦で、硬化は弱い。掘り方は全体的に浅く、貼床は最大で14cmの厚みをもつ部分もあるが、大体10cm未満の薄いものであった。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴はP1～4が検出された。このうちP1が大型でしっかりとしており、支柱相当の材を埋設していたと考えられる。西壁を壊して掘り込まれており、重複遺構の可能性も考慮したが断面観察で切り合いは認められなかった。P2～4はいずれも掘り方での検出だが、本来は床面から掘り込まれていたことが調査区壁際のP4断面などから看取される。規模はともに小さく、補助柱穴的なものと思われる。柱痕跡はP1～4のいずれにおいても確認されなかった。なお、貯蔵穴は検出されなかった。

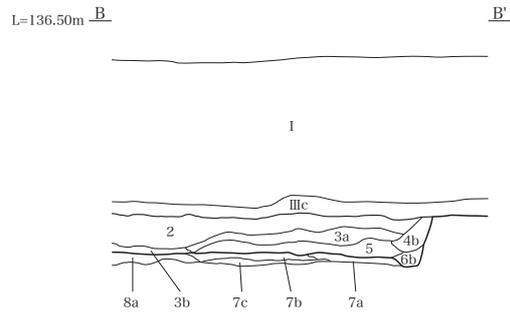
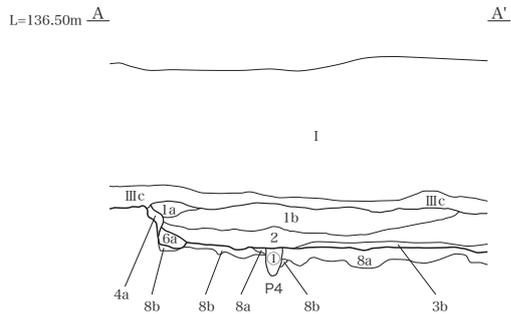
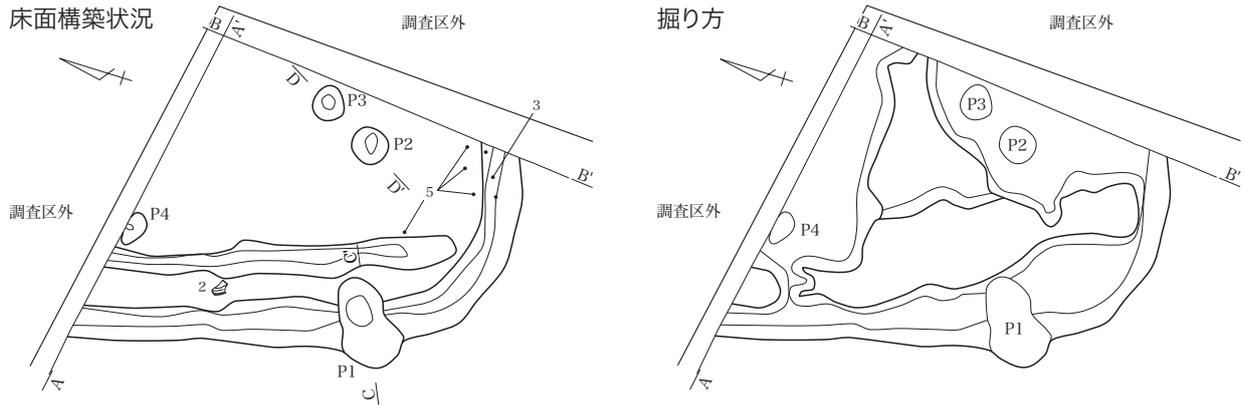
カマド 検出されなかった。SI2～4の状況から、調査区外の東壁に付設されていた可能性が高い。

遺物出土状態 覆土中の混入品も含め、全体として遺物量は少ない。密度は薄い、南壁際の床面からやや浮いた状態でまとまる傾向が認められた。

図示遺物 6点を抽出した。1は須恵器の盤の破片である。体部は湾曲して立ち上がり、口唇部は扁平である。2は須恵器の鉢で、破片資料だが、いわゆる仏鉢(鉄鉢)に分類される特殊な器である。体部下半のタタキ痕が特徴的である。3の須恵器片は体部のケズリや肩部近くに2条の沈線を巡らすことなどから、短胴で肩が張る形状の長頸壺破片である可能性が高い。4は土師器の坏。覆土中の小片だが、形態的にも本住居跡との共伴性が濃く窺われる。5は土師器の甕。胴部の破片のみだが、薄手でしっかりとした焼成である。球胴甕の一部であろう。接合関係はないが同一個体とみられる破片はほかにも少量あり、口縁部破片も認められた。6は編み物石。1点のみの出土だが、調査区外で同種の埋蔵が想定される。

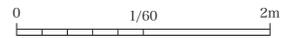
第2表 SII 柱穴観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	柱穴	不整楕円形	逆台形	74	35	58	なし	西壁際に食い込む。
P2	柱穴	隅丸方形	V字形	29	27	31	なし	
P3	柱穴	円形	逆台形	28	25	15	なし	
P4	柱穴	楕円形	U字形	28	(15)	22	なし	北端部調査区外。

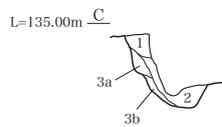


SII 土層説明

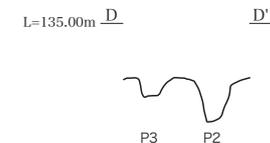
- | | | |
|-------|-----------------------|---|
| 覆土 | 1a. 10YR2/2 黒褐色土 | やや締る。As-C 多量、ローム粒少量含む。 |
| | 1b. 10YR3/3 暗褐色土 | やや締る。As-C 多量、ロームブロック (径 10 ~ 20mm 程度) 少量含む。 |
| | 2. 10YR3/2 黒褐色土 | やや締る。As-C 多量、ロームブロック (径 5 ~ 10mm 程度) 微量含む。 |
| | 3a. 10YR2/3 黒褐色土 | 締り弱い。As-C・ロームブロック (径 10 ~ 20mm 程度) 少量、焼土粒微量含む。 |
| | 3b. 10YR2/2 黒褐色土 | 締り弱い。As-C 少量、ローム粒微量含む。 |
| | 4a. 10YR3/4 暗褐色土 | 締り弱い。As-C (細粒) 微量、ローム斑多量含む。 |
| | 4b. 10YR3/1 黒褐色土 | 締り弱い。As-C・黒色土斑多量、ロームブロック (径 20 ~ 50mm 程度) 少量含む。 |
| | 5. 7.5YR2/2 黒褐色土 | 締り弱い。As-C・ロームブロック (径 5 ~ 10mm 程度)・焼土粒少量含む。 |
| 壁周溝 | 6a. 10YR3/3 暗褐色土 | 締り弱い。As-C 少量、ローム斑多量含む。 |
| | 6b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | 締り弱い。As-C (細粒) 微量、ロームブロック (径 5mm 程度) 多量含む。 |
| 掘り方 | 7a. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 | やや締る。ラミナ状ローム密、下部にラミナ状風化炭化物多量含む。 |
| | 7b. 10YR4/2 灰黄褐色土 | やや締る。As-C (細粒) 少量、ロームブロック (径 5 ~ 20mm 程度) 多量含む。 |
| | 7c. 2.5YR6/3 にぶい橙色粘質土 | 締り強い。灰白色粘土被熱層。炭化物粒少量含む。 |
| | 8a. 10YR4/2 灰黄褐色土 | やや締る。As-C を部分的に含み、ロームブロック密に含む。 |
| | 8b. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | やや締る。As-C 微量、ロームブロック (径 5 ~ 10mm 程度) 少量含む。 |
| P4 覆土 | ①. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 | やや締る。As-C 少量、ローム斑多量含む。 |



P1



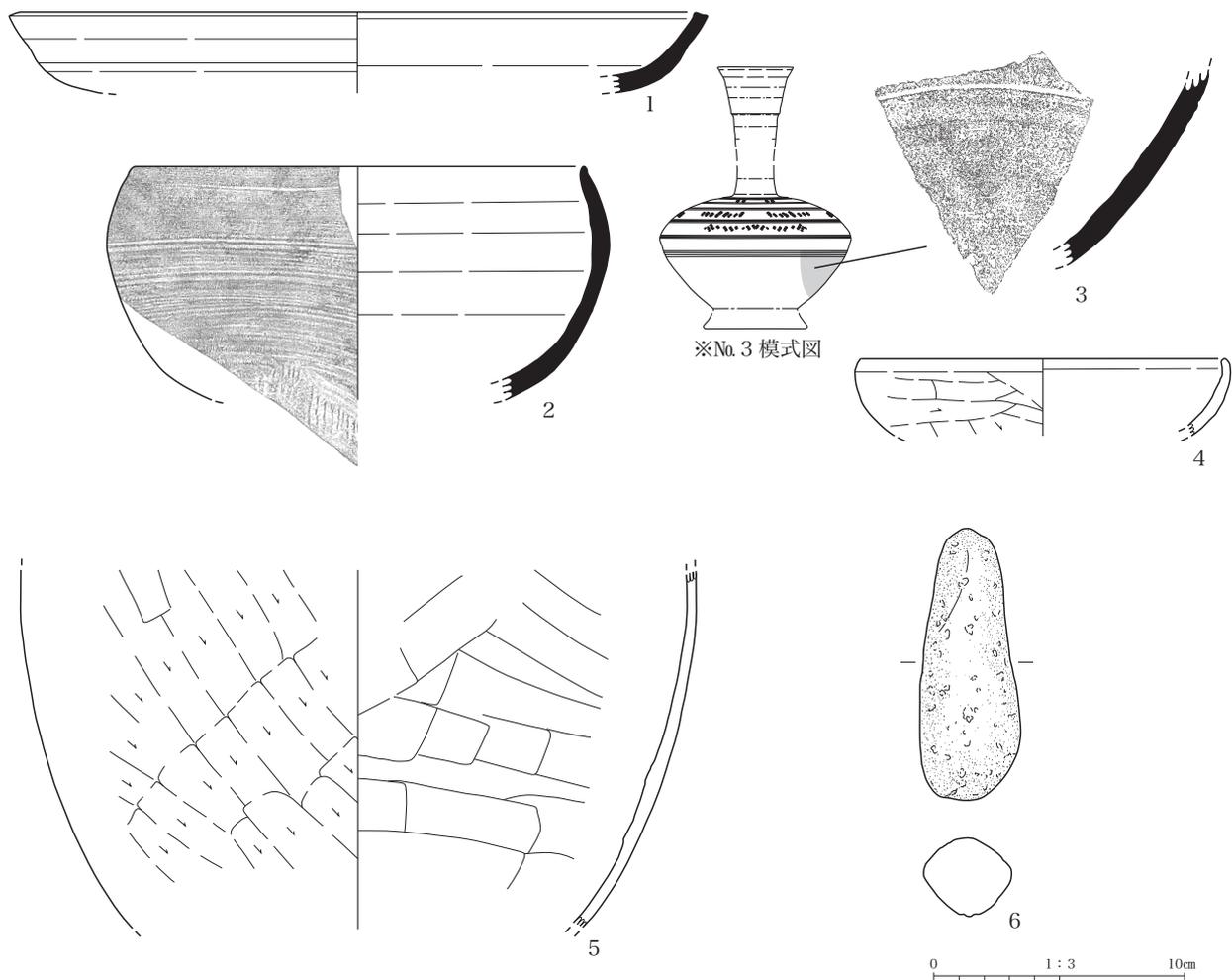
P2・3



SII-P1 土層説明

- | | | |
|-----|---------------|---|
| 1. | 10YR3/1 黒褐色土 | やや締る。As-C 多量、ローム粒微量含む。 |
| 2. | 10YR3/2 黒褐色土 | 締り弱い。As-C 微量、ローム粒少量含む。 |
| 3a. | 10YR3/3 暗褐色土 | 締り弱い。As-C・ローム粒微量。 |
| 3b. | 10YR4/2 灰黄褐色土 | やや締る。ロームブロック (径 5 ~ 20mm 程度) 多量、炭化物粒微量含む。 |

第6図 SII 遺構図



第7図 SII 出土遺物実測図

SI2 (第8～11図 第3・8・9表 PL.2・3・7・8)

位置・残存 調査区南部にて検出された。東半部は攪乱のため上部が失われ、浅いものとなっている。

形状・規模 平面横長の長方形を呈し、東西4.3m程、南北3.3m程を測る。方位は、カマド方向でN-61°-Eを測る。

覆土 床面上の堆積土は5層に大別され、第3・4層がそれぞれ3層ずつ、第5層が2層に細別される。大半が自然堆積とみられるが、中層に堆積する第3層は人為的な埋土の可能性もある。SI1同様、全体的にAs-Cの混入が顕著である。

壁・壁周溝 壁は若干開き気味に立ち上がり、最大高55cm程を測る。壁周溝は西壁の南半部のみに伴い、幅19～24cm、深さ2～6cmを測る浅いものであった。

床面・掘り方 床面はほぼ平坦で、硬化は弱い。貼床は部分的で、大半がハードロームをそのまま床面に利用している。

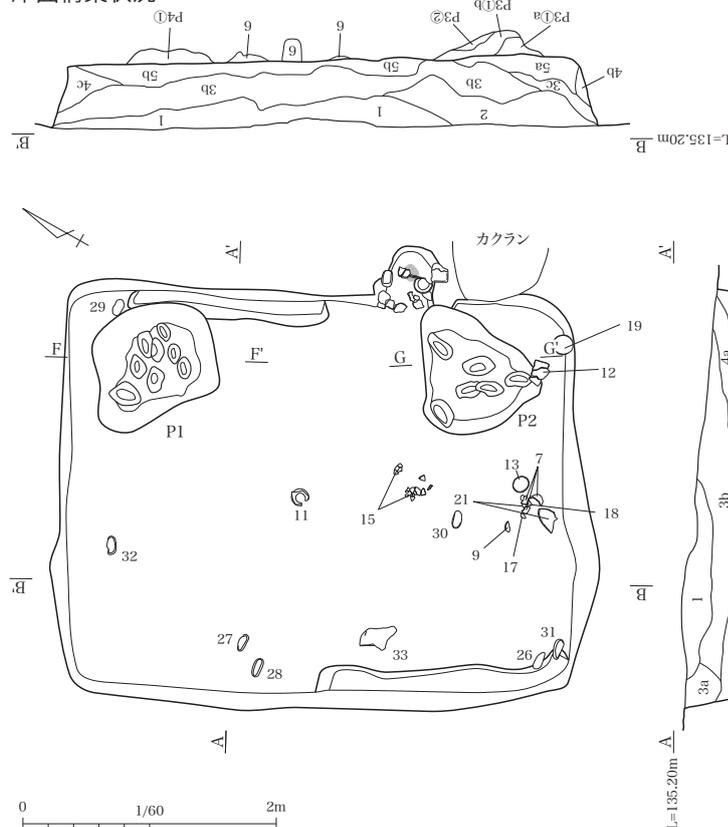
柱穴・貯蔵穴等 柱穴は一切検出されていない。貯蔵穴はカマドを挟み北にP1、南にP2が検出された。ただいずれも底面に耕具痕とみられる小凹凸を伴うことや、人為的に埋め戻されていることなどから、別の用途も推測される。床下からは同様の状況をもつ土坑P3・4も検出されており、特にP1・3・4の掘り込みがハードローム下の粘土質ロームに達している点が注目される。少なくともこの3基については、カマド材などの粘土材採掘坑である可能性も考えられる。

カマド 東壁に付設されている。中央からやや南に寄った位置にあり、燃焼部は壁外に張り出している。煙道部および焚口部は失われているが、残存奥行49cm、最大幅48cmを測る。壁の左右には凝灰岩の切石を立て、白色粘土を含む土材を突き固めて構築されている。北側の壁材は30cm程度の厚みをもつが、この中からもう一つの切石材と割れ石が検出されていることから、壁の修復が考えられる。その際、カマドの幅を極端に縮小している。火床面はほぼ平坦で、奥壁の残存状況から煙道部へはある程度の段差を介して繋がるものと思われる。内部の被熱は弱く、焼土化も火床面のごく一部に留まる。

遺物出土状態 床面に散在、あるいは南壁際の一部に折り重なって出土した。床面遺物は中央から南寄りに拡散して分布する。また、カマド内にも人為的に投げ込まれた状態で遺物が集中していた。

図示遺物 27点を掲載した。7・8は須恵器の坏である。7は底部に回転ヘラケズリを施し、8は直線的な体部形状をもつ。9は須恵器の蓋で、端部のやや内側に小さな返りをもつ。10は須恵器の短頸壺で、小片ではあるが仏教系遺物とされる小型の葉壺に似た形状が想定される。11・12は須恵器横瓶で、接合関係こそ認められなかったが、双方同一個体と考えられる。このうち11の口縁部資料は床面の中央に逆位で置かれた状態で出土しており、器台などへの転用が推測される。12の胴部も南壁際のP2脇で床面に貼り付くように出土し、ほかに同一個体とみられる破片が1点しか存在しないことなどから、これらは破碎した器を転用目的で本住居内に持ち込んだものと考えられる。13～21は土師器の坏。口縁部が短い13～19には大小規格差があるが、焼成や胎土混入物に共通性が認められるものが多い。また、20は模倣坏の系統に置かれるものである。21は平底で、体部の内面には尖った金属でつけられたと思われる線刻がある。22～24は土師器の甕。同一個体とは断定できないが、全体的に薄手の作りである。25以降は石器である。ただ、25のスクレイパーは縄文時代の所産である可能性が残り、混入遺物とみておきたい。26～32は編み物石で、33が台石である。台石の表裏面は平滑になっているが、明瞭な擦痕や敲打痕は観察されなかった。

床面構築状況



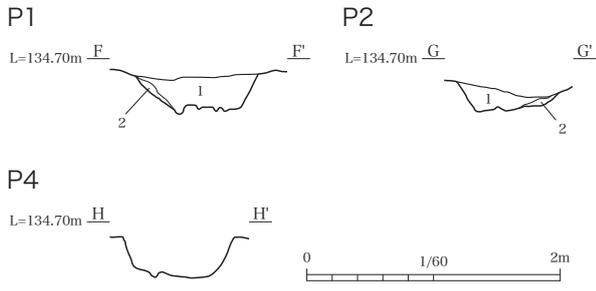
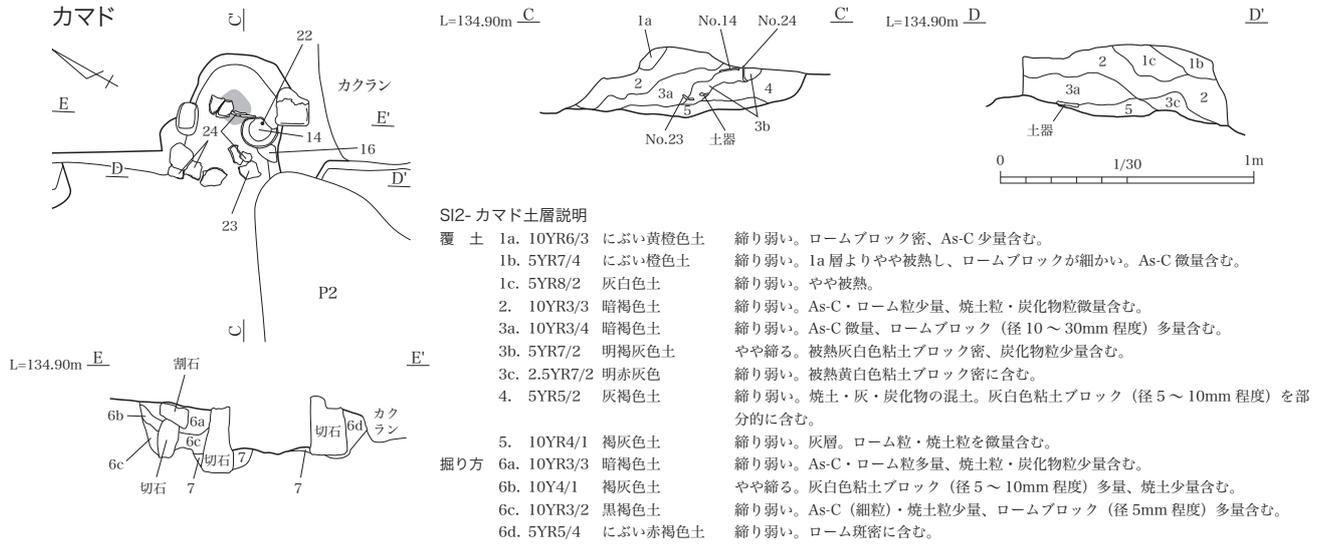
SI2 土層説明

- 覆土 1. 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C 多量、ロームブロック (径 10～20mm 程度)・黒色土斑少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 締り弱い。As-C 多量、ロームブロック (径 5～10mm 程度) 少量含む。
- 3a. 10YR3/1 黒褐色土 締り弱い。As-C・ローム粒多量、焼土粒微量含む。
- 3b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C・ロームブロック (径 10～50mm 程度) 多量、黒色土斑少量含む。
- 3c. 10YR4/2 灰黄褐色土 やや締る。As-C・ローム粒・黒色土粒少量含む。
- 4a. 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C・ロームおよび黒色土ブロック (径 10～20mm 程度) 多量含む。
- 4b. 10YR4/4 褐色土 やや締る。As-C・黒色土粒少量、ローム粒密を含む。
- 4c. 10YR2/3 黒褐色土 締り弱い。As-C 少量、ローム・黒色土ブロック (径 5～10mm 程度) 少量含む。
- 5a. 10YR3/1 黒褐色土 締り弱い。As-C・ローム斑・暗褐色土斑多量含む。
- 5b. 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ラミナ状ローム・黒色土少量含む。
- 掘り方 6. 10YR2/2 黒褐色土 締り強い。ロームブロック密、As-C 少量含む。
- P3 覆土 ① a. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。ローム粒密、上位に風化炭化物含む。
- ① b. 2.5Y5/4 黄褐色土 やや締る。ロームブロック密、炭化物粒少量含む。
- ②. 10YR4/2 灰黄褐色土 締り弱い。ロームブロック (径 5～10mm 程度)・炭化物粒多量含む。
- P4 覆土 ①. 2.5Y5/3 黄褐色土 やや締る。ロームブロック (径 10～40mm 程度) が大半を占め、黒色土斑少量含む。

第 8 図 SI2 遺構図-1

第3表 SI2 土坑観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	貯蔵穴?	不整形	逆台形	94	85	29	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P2	貯蔵穴	不整形	逆台形	107	78	24	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P3	床下土坑	不整形長方形	逆台形	166	102	38	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P4	床下土坑	不整楕円形	椀状	111	78	29	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。

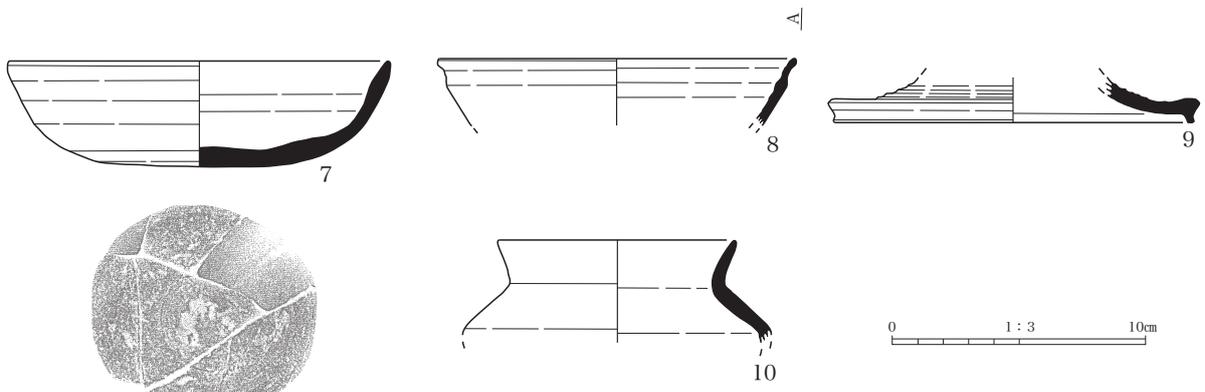
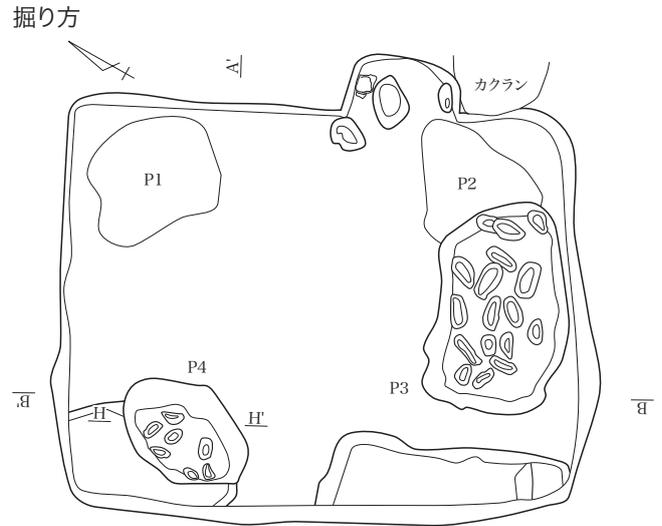


SI2-P1 土層説明

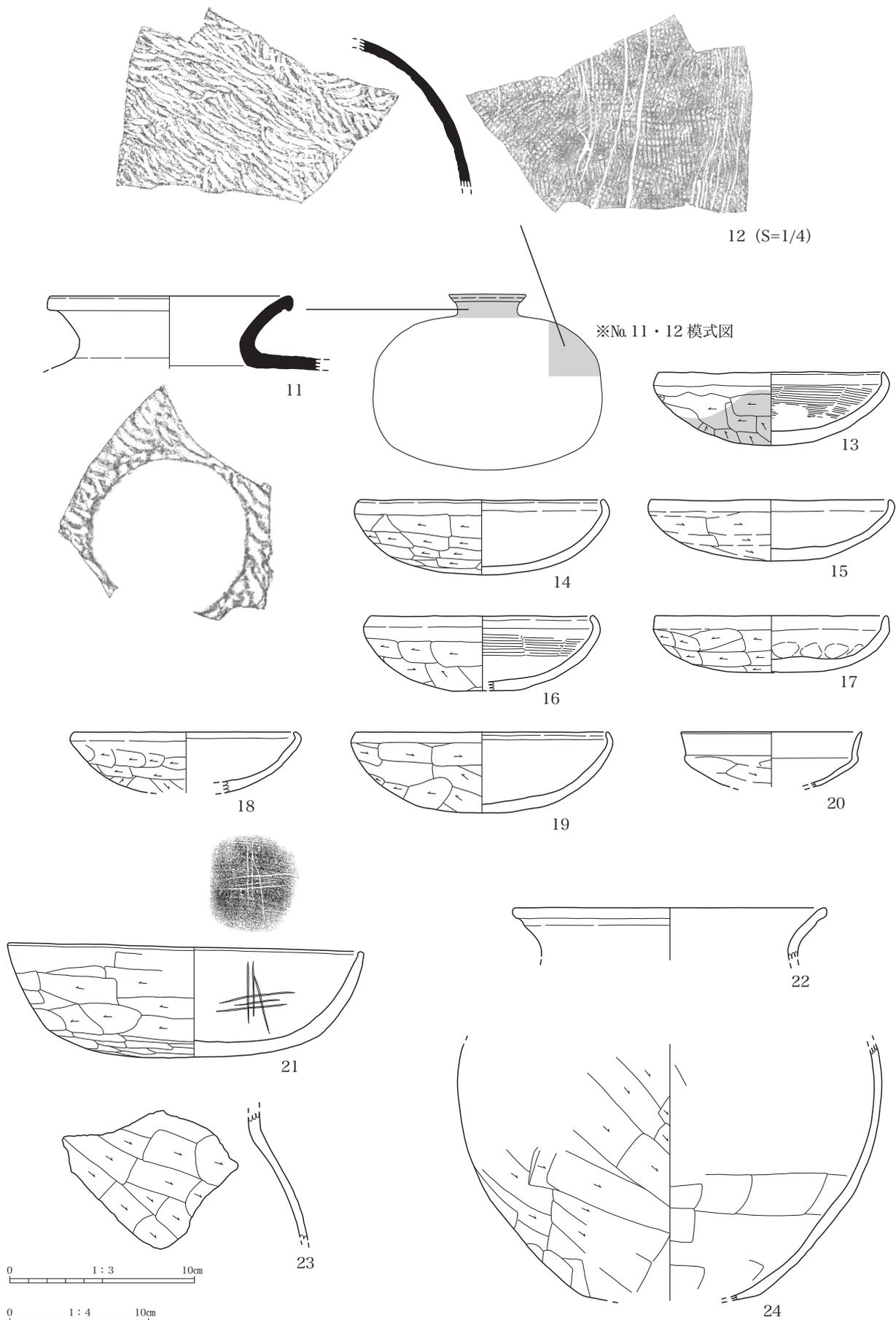
- 10YR4/2 灰黄褐色 締り弱い。ロームブロック密、黒色土斑少量含む。
- 10YR5/3 にぶい黄褐色土 締りなし。ローム斑密に含む。

SI2-P2 土層説明

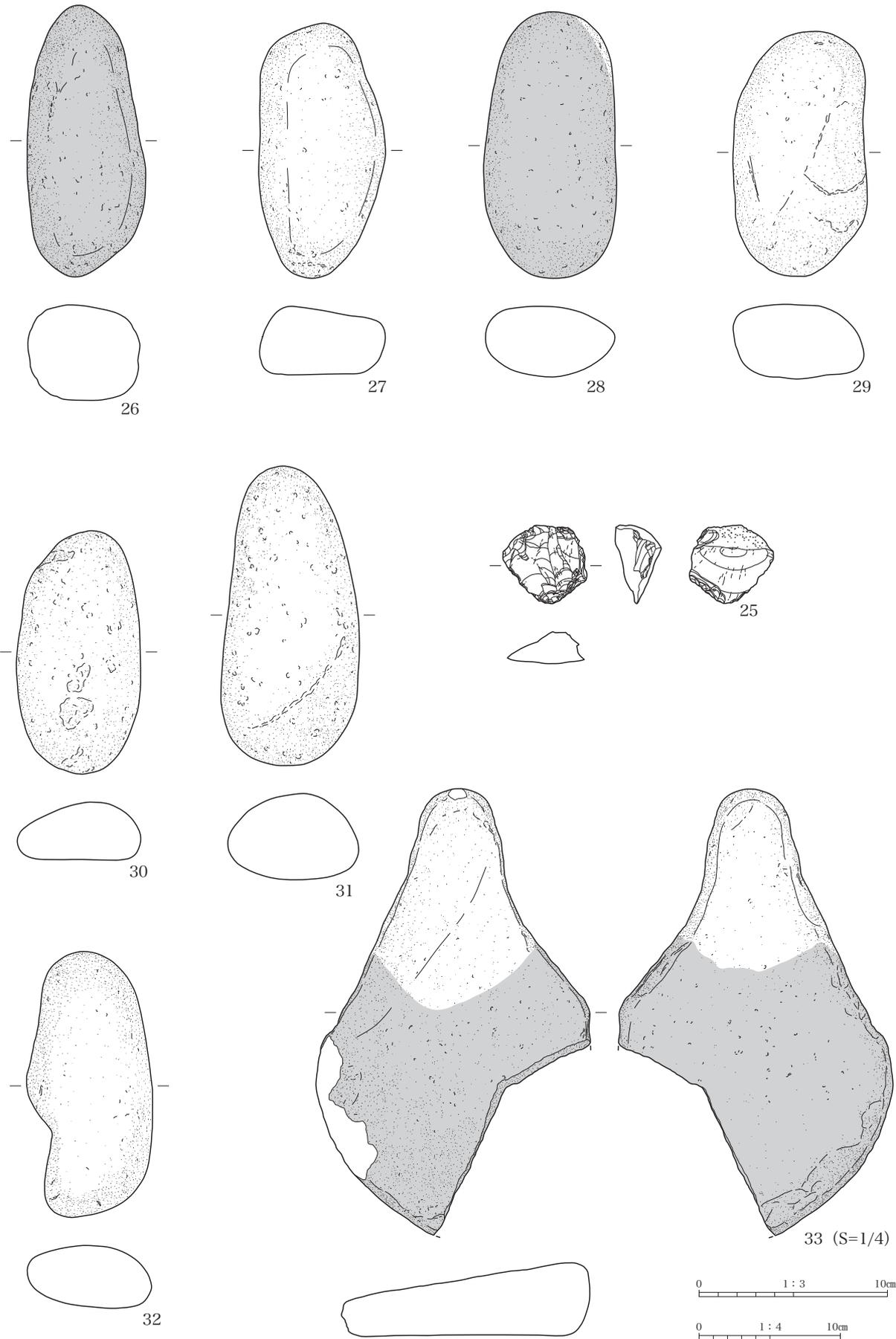
- 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。ロームブロック(径10~30mm程度)多量、焼土粒少量含む。
- 10YR5/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。ローム粒多量含む。



第9図 SI2 遺構図-2・出土遺物実測図-1



第10図 SI2 出土遺物実測図-2



第11图 SI2 出土遺物実測図-3

SI3 (第12～14図 第4・9表 PL.3・8)

位置・残存 調査区中央部にて検出された。北壁は攪乱のため上部を失うが、全体的に残存状態は良い。

形状・規模 平面縦長の長方形で、規模は東西4.2m程、南北3.2m程を測る。カマド方位はN-69°-E。

覆土 床面上の堆積土は7層に大別され、第3・7層が2層、第6層が3層に細別される。本住居跡ではむしろ人為的埋土が大半を占めると考えられ、ロームブロック等の含有率が高いほか、大粒のブロックが目立っている。また、As-Cの量も多い。

壁・壁周溝 壁の立ち上がりは東西壁では開き気味だが、南北壁では垂直に近く、最大高50cm程を測る。壁周溝はほぼ全周するが、西壁では90cm前後内側に巡り、ここから西壁に向かうようにして分岐するもう1条の溝が認められた。この点から本住居跡はもともと東西3.1m程の方形であったと推測され、西壁の拡張をもって現況の形状になったものと考えられる。これらの壁周溝の規模は前者で幅20～33cm、深さ4～8cm、後者で幅19～40cm、深さ3～4cmを測る。後者の溝の掘り込みは、かなり雑である。

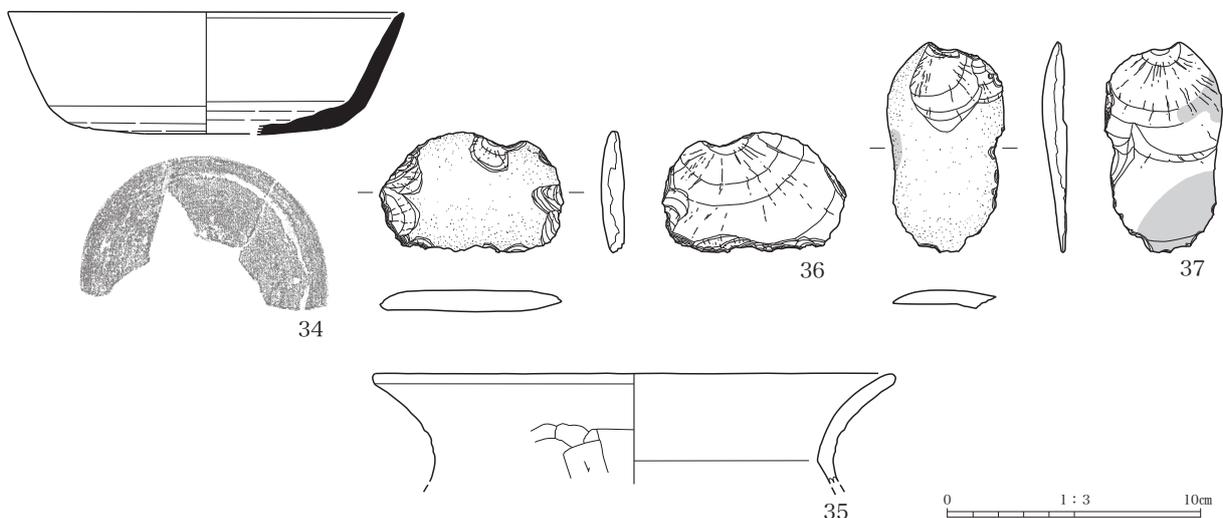
床面・掘り方 床面はほぼ平坦だが、顕著な硬化面はない。貼床はごく一部に認められたのみで、ハードローム直床に近い状況である。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴は認められない。貯蔵穴はカマドの南にP1が検出された。また、掘り方調査の段階で北西部の床下よりP2が検出されている。

カマド 東壁の中央から若干南に寄った位置にあり、燃焼部は壁外に張り出す。焚口部は失われているが、煙道部は完存する。燃焼部は残存奥行58cm、最大幅65cmを測る。奥壁寄りには天井材も残るが、地山を掘り残してその材としている。袖石等、石材の検出は認められなかった。煙道部は長59cm、幅27cm程であり、階段状に掘り込まれている。火床面はほぼ平坦で、煙道部との間には高さ30cm程の奥壁を介している。内部の被熱は弱く、焼土化は部分的であった。

遺物出土状態 覆土遺物も少なく、床面遺物も僅かである。カマド内とその前方に、直接伴うとみられる遺物が若干出土した。

図示遺物 4点を図示した。34は須恵器の坏で、35とともに本住居の年代を示す稀少な指標遺物である。底部には回転ヘラケズリが施されている。35の土師器甕は口縁部の屈曲が極端で、ここに最大径が求められる可能性がある。同一個体とみられる破片は若干認められたが、全体の器形復元には至らなかった。36・37の石器、すなわちスクレイパーと削器は混入遺物の可能性がある。

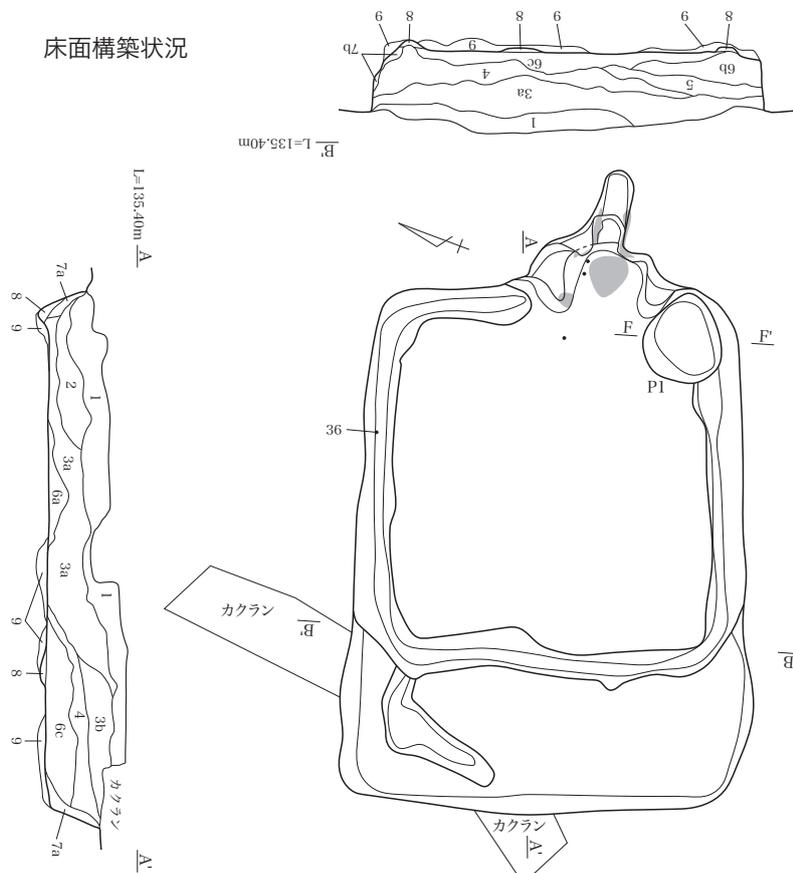


第12図 SI3出土遺物実測図

第4表 SI3土坑観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	貯蔵穴	円形	逆台形	64	61	11	なし	
P2	床下土坑	不整形円形	椀状	70	60	22	なし	人為的に埋土。

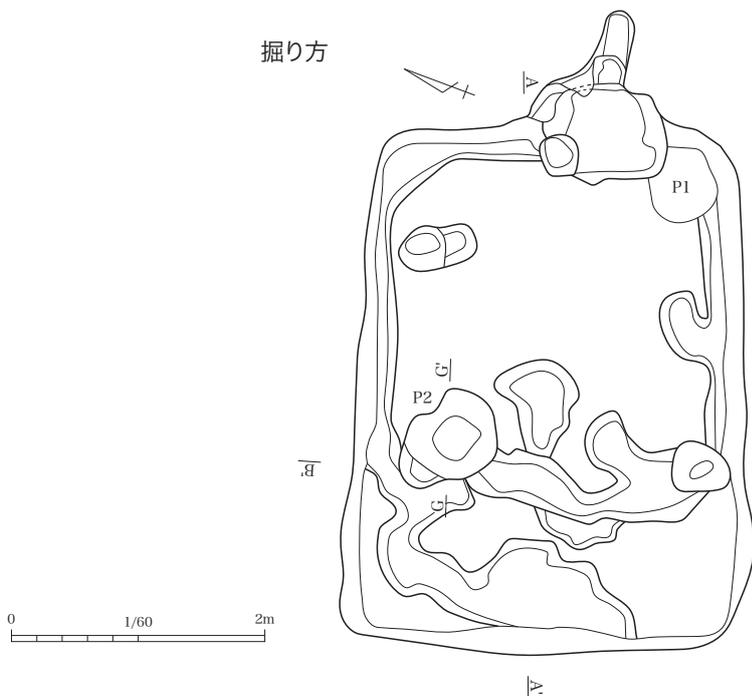
床面構築状況



SI3土層説明

- 覆土
- 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C多量、ロームブロック (径5~30mm程度) 少量含む。
 - 5YR3/3 暗赤褐色土 やや締る。As-C・ロームブロック (径5~10mm程度) 多量含む。
 - 10YR3/4 暗褐色土 締り弱い。As-C・ロームブロック (径5~30mm程度) 多量含む。特に住居中央付近では黒色土ブロック (径5~30mm程度) とともにロームブロックが集中。
 - 10YR3/4 暗褐色土 締り弱い。As-C多量、ロームブロック (径5~10mm程度) 少量含む。
 - 7.5YR3/2 黒褐色土 締り弱い。As-C多量、ロームブロック (径5~30mm程度) 少量含む。
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C少量、ロームブロック (径5~20mm程度) 多量含む。
 - 7.5YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C・ロームブロック (径10mm程度)・親指大の炭化物少量含む。
 - 10YR3/2 黒褐色土 締り弱い。As-C・ロームブロック (径5~10mm程度) 多量、炭化物粒少量含む。
 - 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C・親指大の炭化物少量、ロームブロック (径5~10mm程度) 多量含む。
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色土 締り弱い。ローム斑密に含む。
 - 10YR4/4 褐色土 締り弱い。ロームと黒褐色土がブロック状に混じる。
- 壁周溝
- 10YR3/4 暗褐色土 締り弱い。ローム粒多量含む。
- 掘り方
- 10YR2/3 黒褐色土 やや締る。ロームブロック (径10~30mm程度) 密に含む。

掘り方



P1

L=135.40m F F'

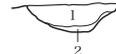


SI3-P1土層説明

- 10YR3/2黒褐色土 締り弱い。As-C・ラミナ状ローム・黒色土少量、焼土粒微量含む。

P2

L=134.80m G G'

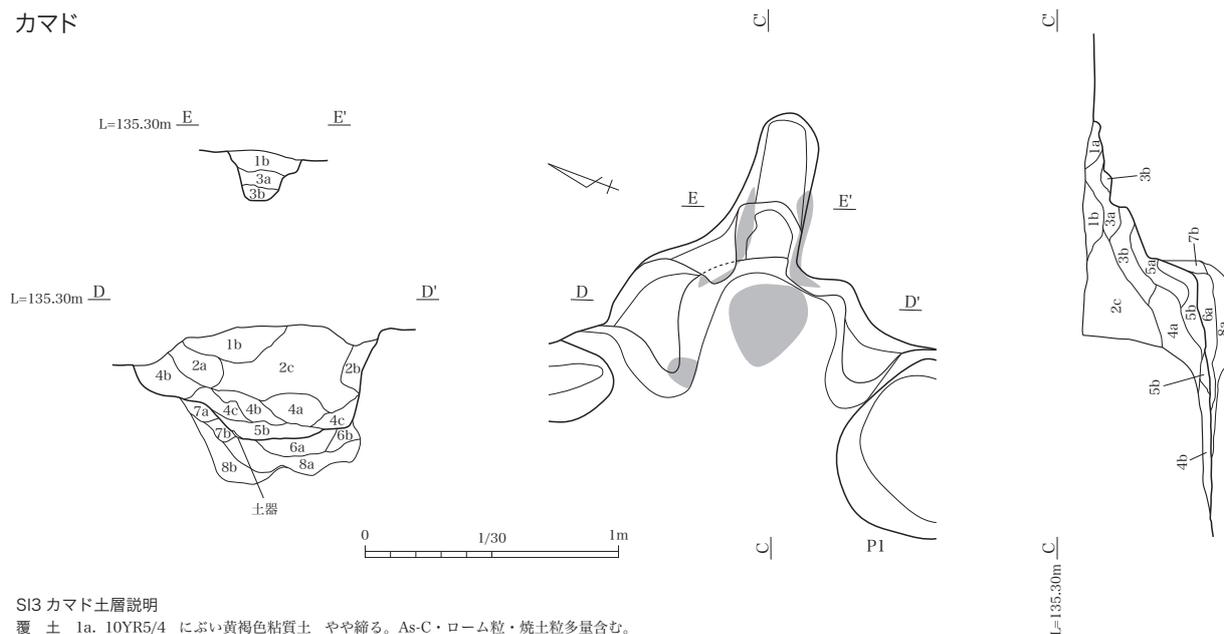


SI3-P2土層説明

- 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。ロームブロック (径10~60mm程度)・黒色土斑多量含む。
- 7.5YR6/6 橙色粘質土 やや締る。黒褐色土ブロック (径5~10mm程度) 多量含む。

第13図 SI3遺構図-1

カマド



SI3 カマド土層説明

覆土	掘り方	説明
1a. 10YR5/4		にぶい黄褐色粘質土 やや締る。As-C・ローム粒・焼土粒多量含む。
1b. 7.5YR4/2		灰褐色土 やや締る。As-C多量、ローム粒・焼土粒少量含む。
2a. 5YR5/3		にぶい赤褐色土 やや締る。As-C少量、一部やや被熱。
2b. 7.5YR5/4		にぶい褐色土 やや締る。As-C・ローム斑・焼土斑多量含む。
2c. 10YR4/3		にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C多量、ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量含む。
3a. 5YR5/2		灰褐色土 やや締る。As-C(細粒)少量、焼土ブロック(径5~10mm程度)多量含む。
3b. 10YR4/1		褐色土 締り弱い。As-C・ローム粒・焼土粒少量含む。
4a. 7.5YR4/3		褐色粘質土 締り強い。As-C(細粒)・焼土ブロック(径5~30mm程度)少量、ロームブロック(径10~20mm程度)密に含む。
4b. 10YR4/2		灰黄褐色土 締り弱い。As-C少量含む。C-C'ではローム粒・焼土粒・炭化物粒を集中的に含む。
4c. 7.5YR5/3		にぶい褐色土 締り弱い。焼土ブロックと灰の混土。As-C(細粒)微量含む。
5a. 5YR5/2		灰褐色土 締り弱い。焼土斑(一部ブロック状)密に、下部に灰を集中的に含む。
5b. 2.5Y/1		黄灰色土 締り弱い。灰層。焼土ブロック(径10mm程度)多量、炭化物粒少量含む。
6a. N5/0		灰色土 締り弱い。灰層。焼土粒少量含む。
6b. 10YR3/2		黒褐色土 締り弱い。ローム粒・焼土粒微量含む。
7a. 10YR5/2		灰黄褐色土 締り弱い。ローム斑密に含む。
7b. 10YR4/1		灰黄褐色土 締り弱い。ローム粒・焼土粒少量含む。
8a. 10YR3/3		暗褐色土 締り弱い。ロームブロック(径5~10mm程度)少量、焼土ブロック(径10mm程度)微量含む。
8b. 10YR3/4		暗褐色土 締り弱い。ロームブロック(径10~20mm程度)少量、焼土粒微量含む。

第14図 SI3 遺構図-2

SI4 (第15~17図 第5・9表 PL.4・9)

位置・残存 調査区西端部にて検出された。残存は悪く、床面および壁は攪乱による損傷が著しい。西部が調査区外となるほかは、全体の2/3程が検出された。

形状・規模 平面方形で、規模は東西3.9m、南北3.95m程を測る。カマド方位はN-59°-E。

覆土 床面上の堆積土は6層に大別され、第3~5層がそれぞれ2層に細別される。いずれも自然堆積とみられるが、最上層の第1層は攪拌土状を呈す。その理由については、直上に基本層序第II層が堆積することから後世の耕作などの影響が考えられる。また、第5層はa・b層ともにP4内に流入しており、本住居跡の埋没時にはP4に蓋などがされず、開口していたことが窺える。

壁・壁周溝 壁は上部がやや開き、特に東壁から北壁にかけての開きが顕著である、最大高は60cm程を測る。壁周溝は東壁を除きコ字状に巡るものと思われ、幅9~16cm、深さ2~8cmを測る。南壁の西寄りて一部途切れる。

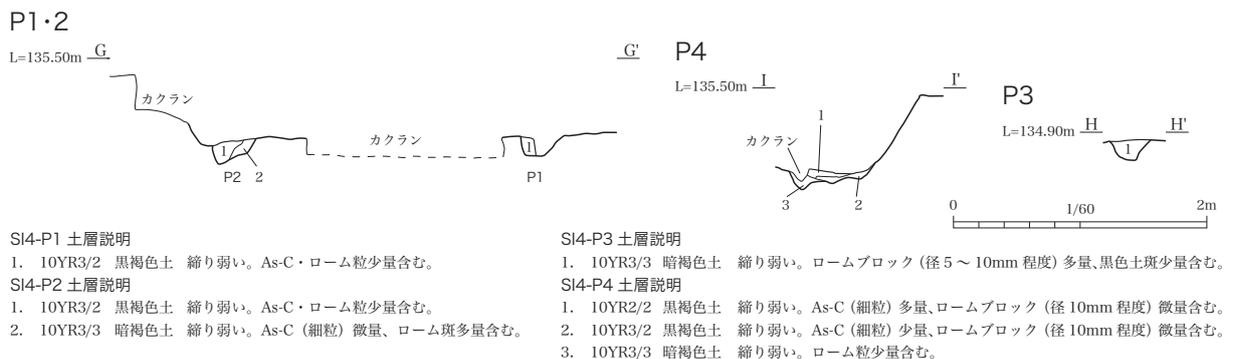
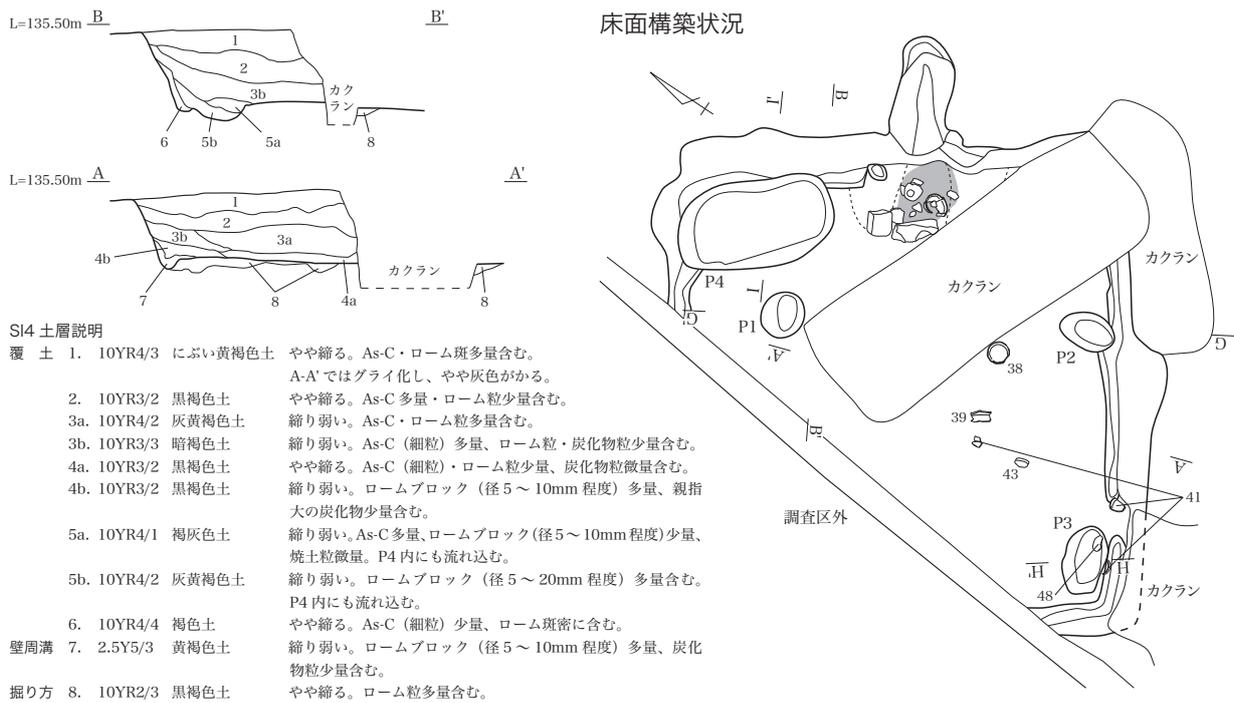
床面・掘り方 床面は攪乱などの影響を受け、部分的に貼床が残存するのみであったが、中央付近には僅かだが硬化面が認められた。掘り方は浅く、薄い貼床が全体に施されていたものと推測される。

柱穴・貯蔵穴等 柱穴はP1~3が認められた。L字形に並んでおり、恐らく調査区外にもう1基が存在したものと考えられる。これらの配置は偏在性をもち、南西寄りの傾向がある。主柱穴とみられるが、いずれも小型で浅い。貯蔵穴はカマドの北にP4が検出されている。

カマド 東壁の中央から僅かに南に寄る。燃焼部は壁内にあり、煙道部も完存する。袖壁は攪乱の影響などから基部しか残存しておらず、その基部も調査中に崩落し、かろうじて断ち割り調査が実施できたのみであった。焚口には凝灰岩切石の袖石と懸架材が残り、ここから復元される燃焼部は奥行60cm、最大幅45cm程である。袖壁は基本層序第Ⅲ層に近似したAs-C混じりの黒色土を主体に構築されているが、突き固めは弱くかなり脆い。火床面は焚口方向へとやや傾斜し、その中央には凝灰岩切石による支脚が1石ある。この支脚は粘土を接着剤のように用いて、火床面上に直接固定されている。奥壁は低めであり、火床面と煙道部との比高差は13cm程度である。煙道部は長94cm、幅42cm程を測り、先端部の煙出しは階段状となっている。内部の被熱は弱く、焼土化は火床面のみ認められる。

遺物出土状態 床面遺物は南部に集中し、カマド内にも多量の土器が人為的に廃棄されていた。

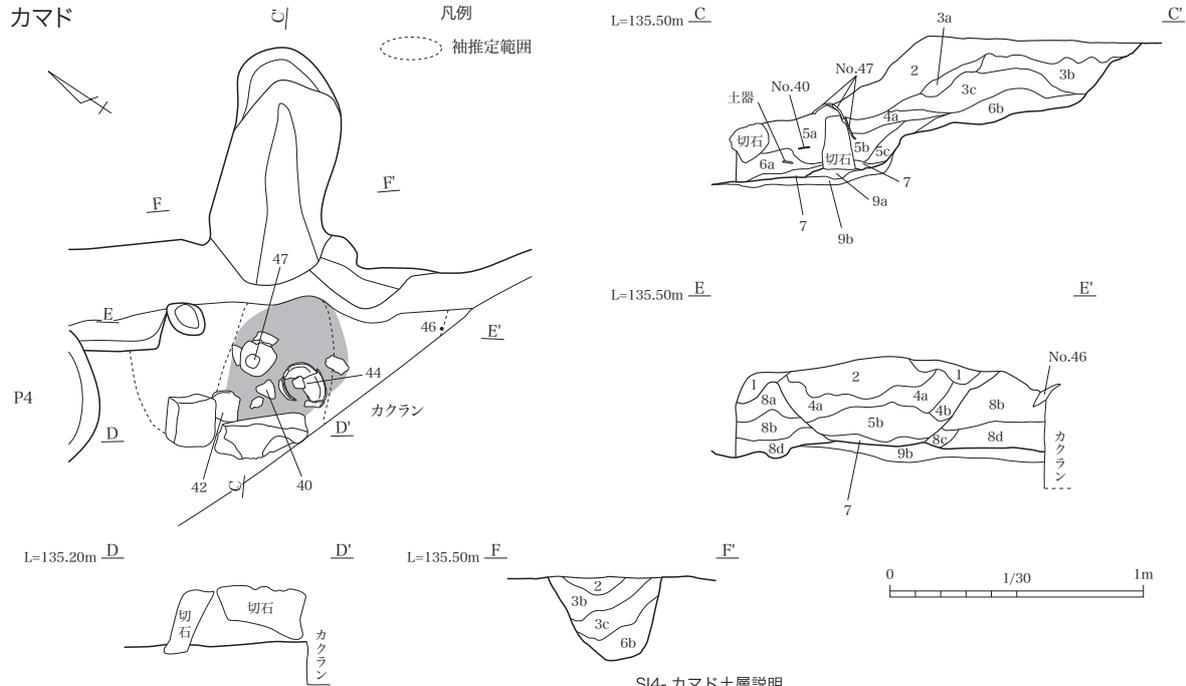
図示遺物 11点を抽出した。38は須恵器の高坏で脚部を欠くが、その剥落面には摩滅痕があり、この状態での使用が考えられる。39は須恵器の甕。口縁部のみで覆土上層から出土していることから、混入遺物の可能性もある。40～44は土師器の坏。このうち44は大型品で器形の歪みも顕著である。45～47は土師器の甕。それぞれ同一個体の可能性もあるが、確証は得られなかった。このうち46はカマドの南袖壁内に大半が埋没した状態で、47は逆位で支脚に被さって出土しており、いずれもカマド構築材への転用品であろう。48の編み物石は1点のみの出土であり、調査区外部分にもいくつか埋蔵されている可能性がある。



第15図 SI4遺構図-1

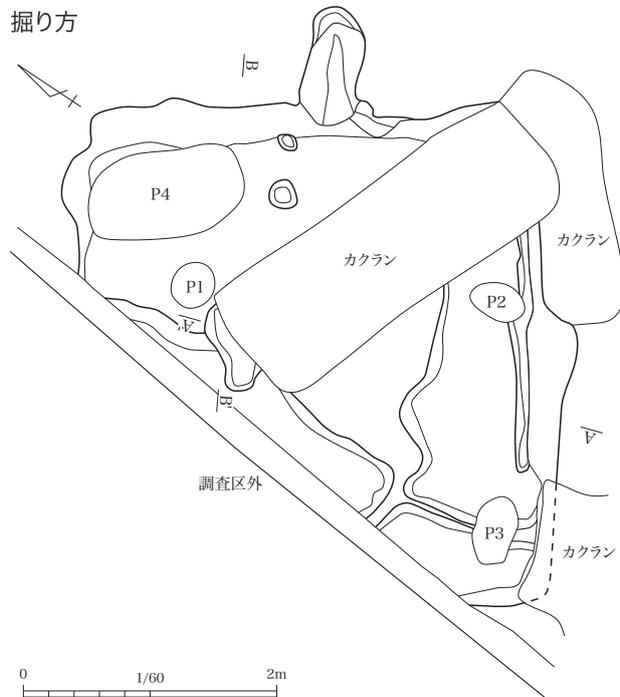
第5表 SI4 柱穴・土坑観察表

名称	分類	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	柱穴	円形	逆台形	37	33	16	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P2	柱穴	楕円形	逆台形	44	30	17	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P3	柱穴	楕円形	逆台形	54	32	16	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。
P4	貯蔵穴	隅丸長方形	逆台形	125	70	15	なし	人為的に埋土、底面に耕具痕。

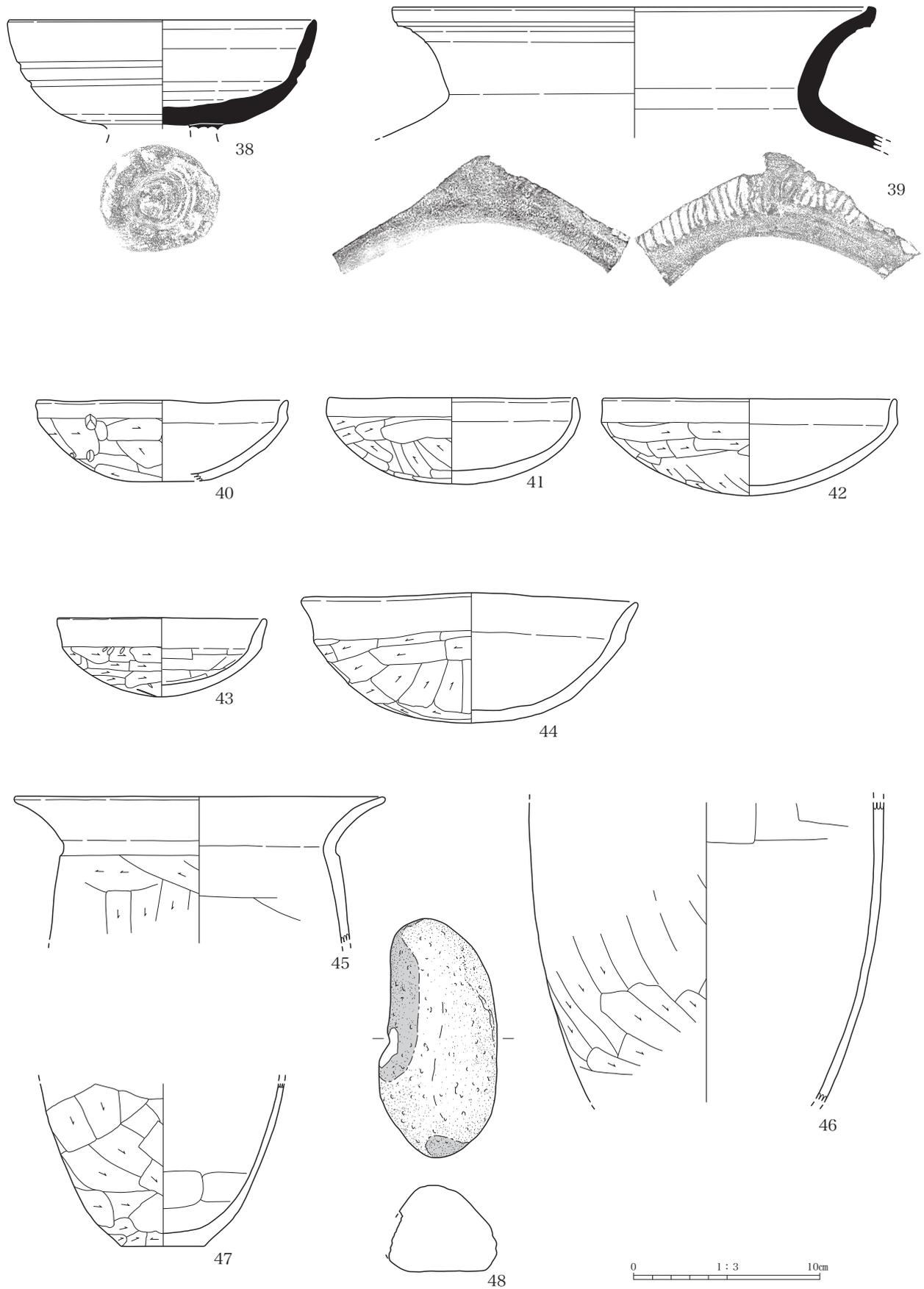


SI4-カマド土層説明

- 覆土 1. 10YR3/4 暗褐色土 やや締る。As-C (細粒)・ロームブロック (径5～10mm 程度) 多量、焼土粒少量含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 やや締る。As-C 多量、焼土粒・炭化物粒少量含む。
 3a. 5YR6/4 にぶい橙色粘質土 締り強い。焼土ブロック密に含む。
 3b. 10YR3/4 暗褐色土 やや締る。As-C 多量、焼土粒少量含む。
 3c. 10YR3/2 黒褐色土 締り弱い。As-C・焼土ブロック (径5～10mm 程度) 多量、ローム粒少量含む。
 4a. 7.5YR4/2 灰褐色土 やや締る。As-C 少量、焼土ブロック (径5～20mm 程度) 多量、炭化物粒微量含む。
 4b. 5YR4/2 灰褐色土 やや締る。As-C・ローム粒・灰白色粘土粒・焼土粒少量含む。
 5a. 7.5YR3/1 黒褐色土 やや締る。As-C・ロームブロック (径5mm 程度) 少量、焼土粒微量含む。
 5b. 7.5YR5/2 灰褐色土 締り弱い。As-C (細粒) 微量、焼土粒少量、灰多量含む。
 5c. 10YR4/2 灰黄褐色土 締り弱い。As-C (細粒)・焼土ブロック (径10mm 程度) 少量含む。
 6a. 7.5YR4/1 褐灰色土 締り弱い。灰を密、焼土ブロック (径5～10mm 程度) 多量含む。
 6b. 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C・焼土粒少量含む。
 7. 5YR5/1 褐灰色土 締りなし。灰層。焼土粒・風化炭化物少量含む。
 袖壁 8a. 7.5YR4/3 褐色土 やや締る。As-C・ロームブロック (径5mm 程度)・焼土粒少量含む。
 8b. 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ロームブロック (径5～10mm 程度)・黒色土斑少量含む。
 8c. 10YR2/2 黒褐色土 やや締る。As-C (細粒) 少量、ローム粒・焼土粒微量含む。
 8d. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 締り弱い。As-C・ロームブロック (径5～10mm 程度) 少量含む。
 掘り方 9a. 7.5YR7/2 明褐色粘質土 やや締る。粘性かなり強。
 9b. 7.5YR4/2 灰褐色土 締り弱い。ローム粒多量、焼土粒・炭化物粒微量含む。



第16図 SI4 遺構図-2



第 17 图 SI4 出土遺物実測図

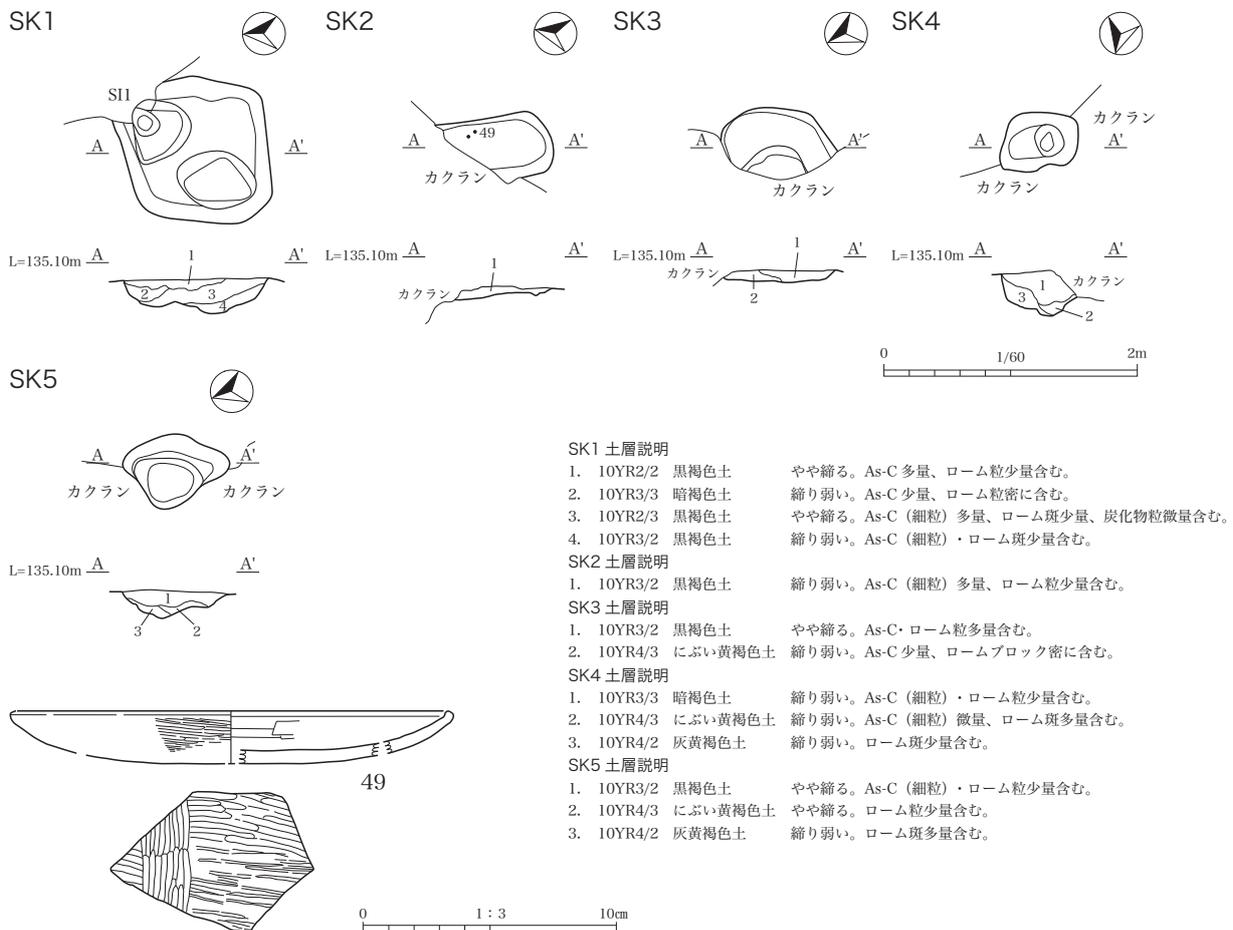
(2) 土坑(SK) (第18・19図 第6・9表 PL.5・6・9)

規則的な配置はみられず、調査区に点在して検出された。時期は新旧さまざまであると思われ、SK6・7・10のように覆土の特徴が住居跡との併行性を示すものもあれば、SK1のように住居跡に壊されるものもある。遺物が出土したのはSK2のみで、土師器の破片が2点出土している。同一個体と思われ、図示した49がそれである。口縁部と底部の破片を図上で復元した。坏とみられるが、かなり浅い器形であり、内外面全体にミガキを施す丁寧な仕上げであることが窺われる。

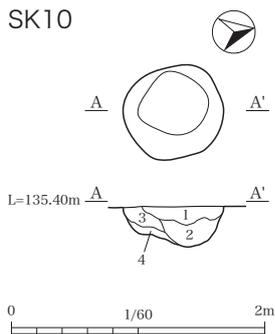
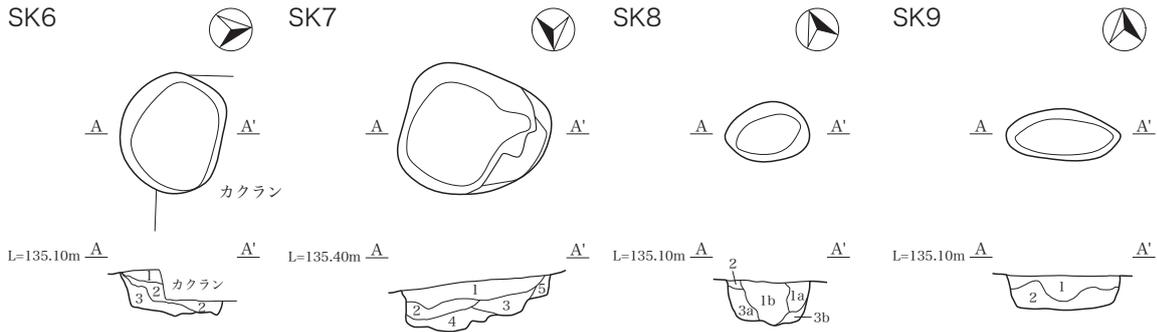
これらの土坑の大半は雑に掘り込まれ、底面の凹凸が著しい。一部には木の根など、非人為的に形成された窪みも混在する可能性がある。各土坑の詳細については、第6表を参照されたい。

第6表 SK 観察表

名称	位置	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
SK1	北東部	隅丸方形	椀状	115	113	27	なし	SI1 に切られる。底面不規則に窪む。
SK2	北部	隅丸長方形	逆台形?	(90)	52	8	土師器破片 2 点	上部削平、攪乱に切られる。残存 2/3。
SK3	北部	円形?	逆台形?	(92)	(56)	9	なし	攪乱に切られる。残存 1/2。底面にピット。
SK4	東部	不整長方形	逆台形	59	47	33	なし	攪乱に切られる。残存 4/5。底面にピット。
SK5	東部	不整円形?	不定形	(84)	(61)	20	なし	攪乱に切られる。残存 1/2。自然形成か。
SK6	南部	円形	箱形	96	81	35	なし	攪乱に切られる。残存 3/4。覆土 SI に近似。
SK7	北西部	楕円形	箱形	114	98	36	なし	攪乱に切られる。西壁に段差。覆土 SI に近似。
SK8	東部	楕円形	箱形	66	47	34	なし	
SK9	東部	長楕円形	箱形	91	41	26	なし	
SK10	南西部	円形	U字形	78	72	31	なし	覆土 SI に近似。



第18図 SK1～5 遺構図・SK2 出土遺物実測図



SK6 土層説明

- 1. 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ローム・黒色土斑少量含む。
- 2. 10YR3/3 暗褐色土 やや締る。As-C 多量、ローム斑少量含む。
- 3. 10YR4/2 灰黄褐色土 締り弱い。As-C 少量、ロームブロック (径 10 ~ 30mm 程度) 多量含む。

SK7 土層説明

- 1. 10YR3/3 暗褐色土 締り弱い。As-C 多量、ローム斑 (一部ブロック状) 多量含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色土 締り弱い。As-C 少量、ローム斑 (一部ブロック状) 密、焼土粒微量含む。
- 3. 10YR3/2 黒褐色土 締り弱い。As-C・ローム斑多量含む。
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C 微量、ロームブロック密、黒色土斑少量含む。
- 5. 10YR4/2 灰黄褐色土 締り弱い。As-C・ローム斑少量含む。

SK8 土層説明

- 1a. 10YR3/2 黒褐色土 締り強い。As-C・ロームブロック (径 10mm 程度) 少量含む。
- 1b. 10YR3/3 暗褐色土 締り強い。As-C 少量、ロームブロック (径 10mm 程度) 微量含む。
- 2. 10YR2/3 黒褐色土 締り弱い。As-C・ラミナ状ローム少量含む。
- 3a. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C・小礫少量、ローム斑多量含む。
- 3b. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 やや締る。ローム斑密に含む。

SK9 土層説明

- 1. 10YR3/2 黒褐色土 締り強い。As-C 多量、ローム粒少量含む。
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り強い。ローム斑密、小礫多量含む。

SK10 土層説明

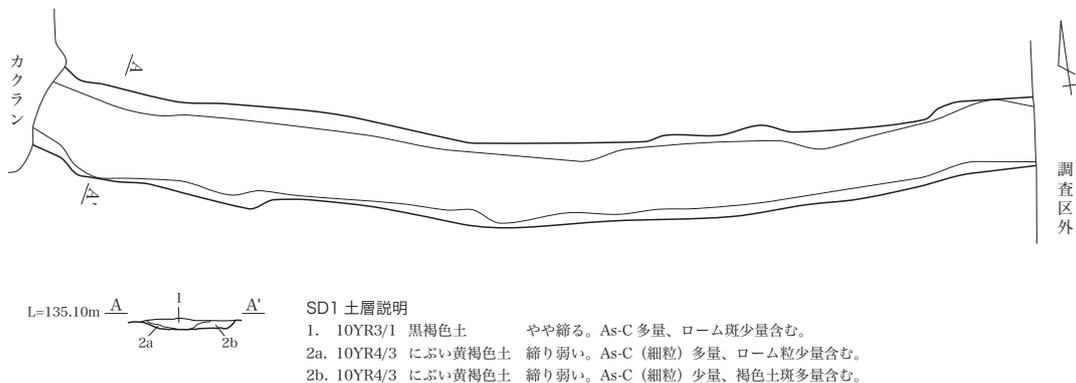
- 1. 10YR3/3 暗褐色土 締り強い。As-C 多量、ロームブロック (径 10 ~ 30mm 程度) 少量含む。
- 2. 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ロームブロック (径 5mm 程度) 微量含む。
- 3. 10YR3/1 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ローム粒少量含む。
- 4. 10YR3/2 黒褐色土 やや締る。As-C・ローム粒少量含む。

第 19 図 SK6 ~ 10 遺構図

(3) 溝跡(SD)

SD1 (第20図 PL.6)

調査区の北東部、SIIの南側に検出された。東端は調査区外、西端は攪乱内にあったものと思われる。走行方位は N - 89 ~ 106° - E と、僅かに湾曲しながら東西に延びる。規模は検出長7.9m程、幅51 ~ 82cmを測り、深さは最深部でも10cm程度とかなり浅い。流水の痕跡は認められず、広めで安定した下幅をもつことなどから、底面の硬化は顕著でないものの通路の類であると考えられる。遺物は覆土中から縄文土器の小破片が1点出土したのみであり、図示に至らず割愛した。本溝跡の時期は、検出面が基本層序第III層上面であることや、覆土における As-C 混入状況などから、古墳時代以降であると思われる。しかし SII ~ 4 の住居跡とはいずれも方向性に食い違いが認められ、これらとの同時性は考えにくいであろう。



SD1 土層説明

- 1. 10YR3/1 黒褐色土 やや締る。As-C 多量、ローム斑少量含む。
- 2a. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C (細粒) 多量、ローム粒少量含む。
- 2b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 締り弱い。As-C (細粒) 少量、褐色土斑多量含む。

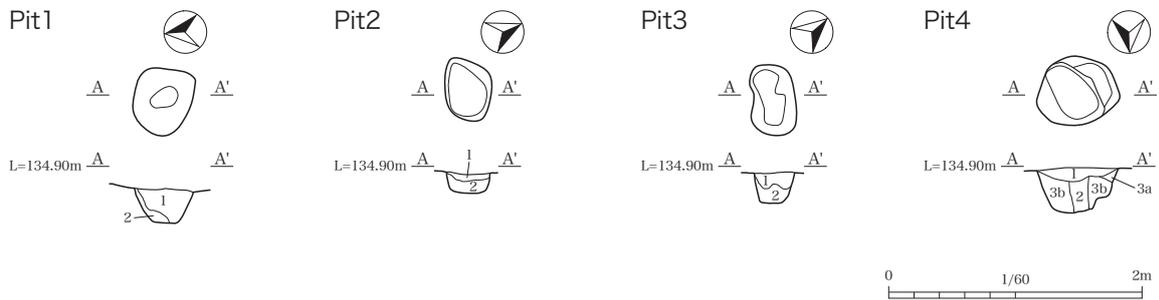
第 20 図 SD1 遺構図

(4)ピット(Pit) (第21図 第7表 PL.6)

検出数は4基と少なく、整った形状であるものはP1・4のみである。P2・3は底面形状が歪で、根穴など自然のものである可能性も残る。P4は土層断面に柱痕跡が確認されたが、掘立柱建物跡の一部としてもその主要部は調査区外に位置すると考えられる。なお、これらのピットからの遺物は殆どなく、P4から僅かに須恵器甕の小片が出土したのみであった。各ピットの詳細については、第7表を参照されたい。

第7表 Pit 観察表

名称	位置	平面形状	断面形状	規模 cm ※ () は残存値			出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ		
P1	北部	隅丸方形	逆台形	(53)	(46)	(27)	なし	上部削平。
P2	北東部	楕円形	箱形	54	48	15	なし	形状歪、自然形成か。
P3	北東部	不整楕円形	逆台形	60	32	24	なし	形状歪、自然形成か。
P4	南部	楕円形	逆台形	64	55	34	須恵器甕片3点	土層断面に柱痕跡(径14cm)。西壁に段差。



Pit1 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 縮り弱い。As-C(細粒)微量、ローム粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 縮り弱い。ロームブロック密に含む。

Pit2 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 縮り弱い。As-C微量、ローム粒少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 やや縮る。ロームブロック(径10~20mm程度)多量含む。

Pit3 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 縮り弱い。As-C(細粒)・ローム斑少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 やや縮る。ロームブロック(径5~10mm程度)少量含む。

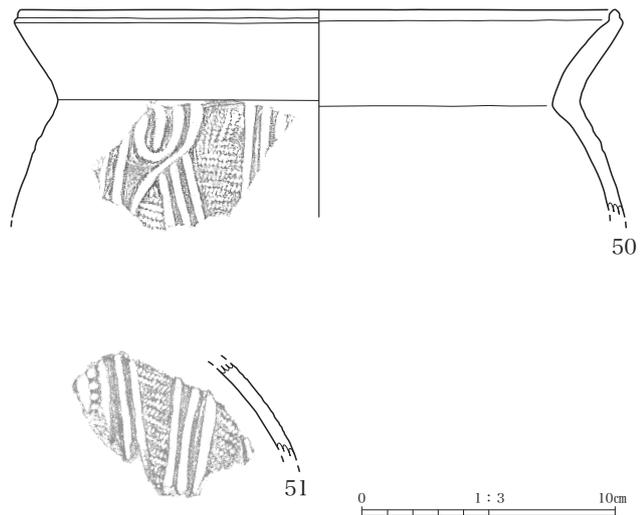
Pit4 土層説明

1. 7.5YR4/2 灰褐色土 やや縮る。As-C多量、ローム粒微量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 縮り弱い。As-C少量含む。※柱痕跡
- 3a. 10YR3/1 黒褐色土 やや縮る。As-C(細粒)・ローム粒微量含む。
- 3b. 10YR2/3 黒褐色土 縮り弱い。小礫・ロームブロック(径5mm程度)少量含む。

第21図 Pit1~4 遺構図

(5)遺構外出土遺物(第22図 PL.9)

調査区の随所に穿たれた攪乱や、南西部に認められた近代以降の耕作痕などからは、少量ではあるが遺物が出土している。その殆どが住居跡と併行する時期の所産と考えられるが、縄文土器の破片が2点出土しており、これを図示した。50・51ともに同一個体の深鉢片と思われる。全体の器形は瓢形が推測され、平行沈線による幾何学文やLR充填縄文などの文様が施されている。これらの特徴から後期前葉、堀之内1式に比定される。



第22図 遺構外出土遺物実測図

第8表 北原・萩林遺跡出土遺物観察表-1

出土 No	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調 (外側・内側) / 焼成	胎土	特徴・調整・文様等
1	須恵器 盤	SI1 覆土	口:(27.8) 高:(3.3) 底:- 最大径:- 口縁~体部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	砂粒・白色粒	ロクロ整形。 外:体部下位回転ヘラケズリ。
2	須恵器 鉢	SI1 覆土	口:(17.9) 高:(9.4) 底:- 最大径:(20.0) 口縁~体部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	砂粒	ロクロ整形。 外:体部カキメ、底部付近に平行タタキ。 いわゆる「仏鉢」。
3	須恵器 長頸壺	SI1 覆土	口:- 高:(7.8) 底:- 最大径:- 体部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	粗砂粒・石英 チャート	外:上位に2条の平行沈線、中~下位ヘラケズリ。
4	土師器 坏	SI1 覆土	口:(14.5) 高(3.1) 底:- 最大径:(15.0) 口縁~体部破片 外:橙色 内:鈍橙色/不良・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内:ヨコナデ。 外面やや摩滅。
5	土師器 甕	SI1 覆土	口:- 高:(14.4) 底:- 最大径:- 胴部破片 底面:橙色 内:鈍黄橙色/良好・酸化焰	砂粒・角閃石	胴部球状を呈す。 外:ヘラケズリ。 内:ヘラナデ。
6	石器 編物石	SI1 覆土	長:10.9 幅:4.0 厚:3.2 重:206.36 完形		石材:粗粒輝石安山岩
7	須恵器 坏	SI2 床面	口:15.0 高:4.2 底:8.0 最大径:- 2/3 外:灰白色 内:灰白色/不良・還元焰	砂粒・白色粒 褐色粒・雲母	ロクロ整形。 外:底部回転ヘラケズリ。
8	須恵器 坏	SI2 床面	口:(13.9) 高:(2.7) 底:- 最大径:- 口縁~体部破片 外:灰色 内:灰白色/良好・還元焰	砂粒・白色粒	ロクロ整形。
9	須恵器 蓋	SI2 床面	口:(14.0) 高:(1.8) 底:- 最大径:(14.6) 口縁部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	粗砂粒・白色粒 石英	ロクロ整形。
10	須恵器 短頸壺	SI2 覆土	口:(9.2) 高:(4.1) 底:- 最大径:(12.6) 口縁~肩部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	砂粒・白色粒	外:ナデ。 内:ナデ。
11	須恵器 横瓶	SI2 床面	口:13.0 高:(4.0) 底:- 最大径:- 口縁~頸部 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	粗砂粒・白色粒 黑色粒	外:口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。 内:口縁部ヨコナデ、胴部上端青海波状の当て具痕。 口縁部内面に輪積痕残存。No.12と同一個体か。
12	須恵器 横瓶	SI2 床面	口:- 高:(10.7) 底:- 最大径:- 胴部破片 外:灰色 内:灰色/良好・還元焰	粗砂粒・白色粒	外:格子状タタキ後、浅い沈線を部分的に施す。 内:青海波状の当て具痕。 No.11と同一個体か。
13	土師器 坏	SI2 床面	口:12.3 高:4.0 底:- 最大径:12.8 完形 外:鈍褐色 内:鈍褐色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁~体部工具(ハケ状)によるヨコナデ、底部ナデ。 体~底部外面に煤付着。
14	土師器 坏	SI2 カマド	口:13.1 高:4.1 底:- 最大径:13.8 3/4 外:橙色 内:橙色/良好・酸化焰	砂粒・角閃石 雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、体~底部ナデ。
15	土師器 坏	SI2 床面	口:12.8 高:3.4 底:- 最大径:13.1 ほぼ完形 外:橙色 内:橙色/不良・酸化焰	粗砂粒・白色粒 チャート・雲母 角閃石	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、体~底部ナデ。 外面摩滅。
16	土師器 坏	SI2 カマド	口:12.0 高:4.1 底:- 最大径:12.8 1/2 外:鈍褐色 内:鈍褐色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁~体部工具(ハケ状)によるヨコナデ、底部ナデ。 口縁~底部内面に黒色の付着物
17	土師器 坏	SI2 床面	口:(12.5) 高:3.1 底:- 最大径:(12.8) 1/3 外:橙色 内:橙色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。 体・底部境界に指頭圧痕連続。
18	土師器 坏	SI2 覆土	口:(12.0) 高:(3.4) 底:- 最大径:(12.5) 1/3 外:橙色 内:橙色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。
19	土師器 坏	SI2 床面	口:13.8 高:4.4 底:- 最大径:14.2 完形 外:鈍褐色 内:鈍赤褐色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。 体部外面の一部に煤付着。
20	土師器 坏	SI2 覆土	口:(9.6) 高:(3.0) 底:- 最大径:- 口縁~体部破片 外:橙色 内:橙色/不良・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。 外面摩滅。
21	土師器 坏	SI2 覆土	口:19.2 高:6.1 底:- 最大径:- 1/2 外:橙色 内:橙色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 角閃石・褐色粒 チャート	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。 体部内面に線刻。
22	土師器 甕	SI2 カマド内	口:(16.8) 高:(2.9) 底:- 最大径:- 口縁部破片 外:鈍褐色 内:鈍褐色/良好・酸化焰	砂粒・褐色粒 黒色粒・雲母	外:ヨコナデ。 内:ヨコナデ。
23	土師器 甕	SI2 カマド内	口:- 高:(6.9) 底:- 最大径:- 頸~肩部破片 外:橙色 内:鈍褐色/良好・酸化焰	砂粒・褐色粒 角閃石・黒色粒 雲母	外:頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内:ヘラナデ。
24	土師器 甕	SI2 カマド内	口:- 高:(13.9) 底:- 最大径:- 胴~底部 外:鈍黄褐色 内:鈍褐色/良好・酸化焰	砂粒・白色粒 雲母・チャート 石英	胴部球状を呈す。 外:ヘラケズリ。 内:ヘラナデ。
25	石器 スレイバー	SI2 覆土	長:4.2 幅:4.4 厚:2.4 重:38.99 完形		石材:黒色頁岩 縄文時代か。
26	石器 編物石	SI2 床面	長:14.5 幅:6.3 厚:5.2 重:774.79 完形		石材:粗粒輝石安山岩 全面に煤付着。

第9表 北原・萩林遺跡出土遺物観察表-2

出土 No	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 残存 色調(外側・内側) / 焼成	胎土	特徴・調整・文様等
27	石器 編物石	SI2 床面	長:13.6 幅:6.8 厚:3.7 重:558.89 完形		石材:粗粒輝石安山岩
28	石器 編物石	SI2 床面	長:14.3 幅:7.1 厚:3.8 重:666.08 完形		石材:粗粒輝石安山岩 表面に煤付着。
29	石器 編物石	SI2 床面	長:13.1 幅:7.1 厚:4.4 重:663.78 完形		石材:変玄武岩 表面一部摩滅。
30	石器 編物石	SI2 床面	長:13.0 幅:6.6 厚:3.7 重:428.81 完形		石材:溶結凝灰岩
31	石器 編物石	SI2 床面	長:16.0 幅:7.4 厚:4.6 重:778.35 完形		石材:ひん岩
32	石器 編物石	SI2 床面	長:14.3 幅:6.7 厚:3.5 重:547.22 完形		石材:閃緑岩
33	石器 台石	SI2 床面	長:31.9 幅:19.5 厚:5.3 重:3136.12 3/4		石材:粗粒輝石安山岩 表・裏面に煤付着。
34	須恵器 坏	SI3 覆土	口:(15.4) 高:4.9 底:9.2 最大径:- 1/3 外:灰色 内:灰色/良好・還元焼	砂粒・白色粒	ロクロ整形。 外:底部回転ヘラケズリ。
35	土師器 甕	SI3 覆土	口:(20.4) 高:(4.4) 底:- 最大径:- 口縁部破片 外:鈍黄褐色 内:灰黄褐色/良好・酸化焼	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:ヨコナデ、下端部ヘラケズリ。 内:ヨコナデ、下端部ヘラナデ。
36	石器 スライパー	SI3 覆土	長:4.8 幅:7.3 厚:0.9 重:39.86 完形		石材:黒色頁岩 縄文時代か。
37	石器 削器	SI3 覆土	長:8.4 幅:4.7 厚:0.9 重:32.03 完形		石材:黒色頁岩 背面および腹面の一部に煤付着。 縄文時代か。
38	須恵器 高坏	SI4 床面	口:16.4 高:(5.9) 底:- 最大径:- 坏身部 外:暗灰色 内:灰色/良好・還元焼	粗砂粒・白色粒 石英	ロクロ整形。 体部中位に2条の平行沈線、底部に脚台部剥落痕。
39	須恵器 甕	SI4 覆土	口:25.2 高:(7.8) 底:- 最大径:- 口縁~頸部破片 外:灰黄色 内:灰黄色/良好・還元焼	粗砂粒・白色粒 褐色粒・雲母	外:ヨコナデ。 内:口縁部ヨコナデ、胴部上端に当て具痕連続。
40	土師器 坏	SI4 カマド内	口:13.4 高:4.3 底:- 最大径:- ほぼ完形 外:橙色 内:橙色/不良・酸化焼	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁~体部ヨコナデ、底部ナデ。 外面やや摩滅。
41	土師器 坏	SI4 床面	口:13.2 高:4.7 底:- 最大径:13.6 ほぼ完形 外:橙色 内:橙色/不良・酸化焼	砂粒・白色粒 雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁~体部ヨコナデ、底部ナデ。 外面・内面ともに摩滅。
42	土師器 坏	SI4 カマド内	口:15.7 高:5.3 底:- 最大径:- 2/3 外:橙色 内:鈍褐色/良好・酸化焼	砂粒・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、体~底部ナデ。
43	土師器 坏	SI4 床面	口:11.1 高:4.3 底:- 最大径:- 1/2 外:鈍褐色 内:鈍褐色/良好・酸化焼	砂粒・角閃石 雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラナデ。
44	土師器 坏	SI4 カマド内	口:17.7 高:7.1 底:- 最大径:- 完形 外:橙色 内:明赤褐色/良好・酸化焼	粗砂粒・白色粒 チャート・雲母	外:口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、体~底部ナデ。
45	土師器 甕	SI4 覆土	口:(19.6) 高:(7.9) 底:- 最大径:- 口縁~肩部破片 外:橙色 内:橙色/良好・酸化焼	砂粒・白色粒 褐色粒・角閃石	外:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内:口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。
46	土師器 甕	SI4 カマド袖	口:- 高:(16.2) 底:- 最大径:- 胴部破片 外:橙色 内:灰褐色/良好・酸化焼	砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:ヘラケズリ。 内:ヘラナデ。
47	土師器 甕	SI4 カマド内	口:- 高:(8.8) 底:4.5 最大径:- 胴~底部 外:灰黄褐色 内:明赤褐色/良好・酸化焼	粗砂粒・白色粒 角閃石・雲母	外:ヘラケズリ。 内:ヘラナデ。
48	石器 編物石	SI4 床面	長:13.0 幅:6.3 厚:4.8 重:569.67 一部欠損		石材:粗粒輝石安山岩 表面の一部に煤付着。
49	土師器 坏	SK2 底面	口:(17.0) 高(2.1) 底:- 最大径:- 口縁部破片・底部破片(図上復元) 外:明赤褐色 内:明赤褐色/良好・酸化焼	砂粒・雲母	外:ヘラミガキ。 内:ヘラナデ。
50	縄文土器 深鉢	遺構外 (攪乱内)	口:(23.5) 高:(8.3) 底:- 最大径:- 口縁~肩部破片 外:鈍黄褐色 内:鈍黄褐色/良好・酸化焼	粗砂粒・褐色粒 雲母・石英	口縁部「く」の字状に外反し、口唇部は直立して尖る。 文様:口縁部無文。胴部3条1単位の沈線区画にLR縄文充填。 No.51と同一個体か。
51	縄文土器 深鉢	遺構外 (攪乱内)	口:- 高:(3.9) 底:- 最大径:- 胴部破片 外:鈍黄褐色 内:鈍黄褐色/良好・酸化焼	砂粒・白色粒 雲母	文様:3条1単位の区画内にLR縄文充填。押圧のある隆帯による縦線区画。 No.50と同一個体か。

第VI章 まとめ

第1節 住居跡出土土器について

今回の調査では4軒の住居跡が検出されている。出土遺物は土器・編み物石・台石で、金属製品や石製品などは一切認められなかった。出土状況では床面上に散在するか、カマド内や壁際に集中する傾向が強く、覆土中の一括品も概して少ない。また、SI2・4では完形品、あるいはこれに準じる個体が目立つものの、SI3では断片的な資料が少量散見されたのみであり、遺物の遺棄・廃棄のあり方も多様であったと推測される。

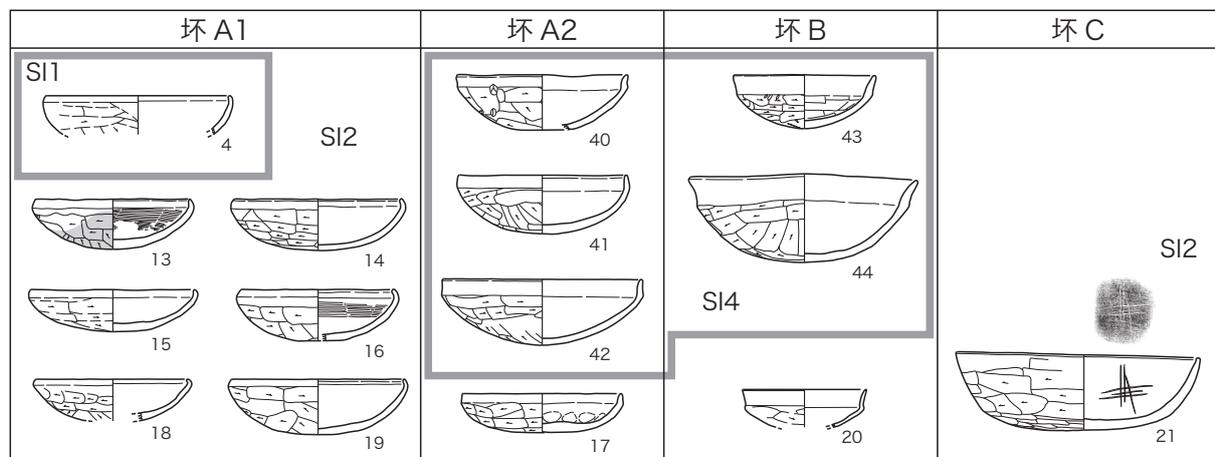
さて、本節ではこれら住居跡の出土土器をまず集成し、併せてその様相を整理してみたい。

(1) 土師器の様相

器種は坏・甕が認められた。甕については部分的な残片のみで、器形全体が揃うものは皆無である。また、SI4ではカマド構築材への転用品とみられるものが主体であるが破片ばかりで、いずれもカマド掛け残しの状況は看取できない。むしろ意図的な破壊行為を示すものとして捉えられるであろう。一方坏類は、SI2・4の例をみると甕とは対照的であり、カマド内へ集積されたか、あるいはそのまま放置されたような状況で出土している。こういった相違には恐らく当時の「甕」「坏」に対する何らかの価値観が表出されていると考えられる。

甕は前述の通り資料が限定されるが、長胴甕・球胴甕の2者の混在を認めた。ともに胴部は薄手で、厚さは最厚でも4mm程度である。整形は外面へラケズリ、内面へラナデで、削り手はいずれも短い。長胴甕のうちSI4のNo.45～47(第17図)は、別個体の可能性が残るものの、それぞれの特徴から口縁部に最大径をもち、肩部が僅かに張る形状であったことが窺われる。

坏は丸底坏がほとんどで、1点だけ平底坏がある(SI2-No.21)。さらに丸底坏はいわゆる模倣坏とそれ以外のものに大別されるが、典型的な模倣坏は客体的であることから、模倣坏を「坏B」、その他を「坏A」とし、そして平底坏を「坏C」としておく。さらに坏Aは、口縁部が強く「く」字状に内傾する「A1」、直立傾向にある「A2」に細別した。なお、坏A2は模倣坏からの派生とも考えられるが、器形への志向が坏Bとは明確に分離でき、むしろ坏A1に準じることから、ここでは模倣坏の範疇から外しておきたい。

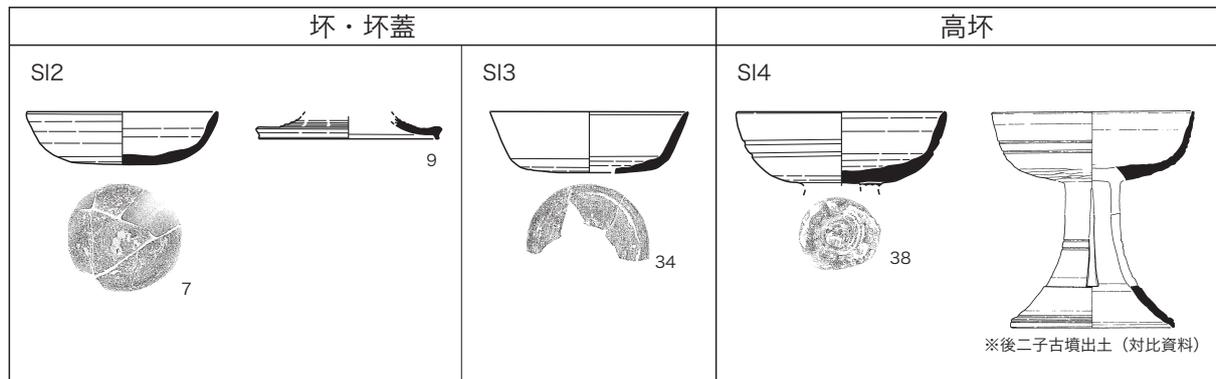


第23図 土師器坏集成図

(2) 須恵器の様相

坏・蓋・高坏・盤・鉢・甕・長頸壺・短頸壺・横瓶と様々な器種が認められたが、器形での分類が可能なものはSI2・3の坏各1点(No.7・34)と、SI4の高坏(No.38)のみであった。そのほかは破片での出土であったが、概観して日常什器以外の器種が目立ち、これらはその比率の高さから集落内のいずこかで使用されていた可能性が十分に考えられる。特にSII-No.2の鉢(第7図)やSI2-No.10の短頸壺(第9図)などは仏器的な性格が与えられ、本遺跡の集落に対し特徴的な器種と位置付けることができる。

ここで坏と高坏に注目してみたい。坏はともに底部が回転ヘラケズリで整形され、体部から口縁部にかけては開いて立ち上がる。その立ち上がりはNo.7が湾曲気味なのに対し、No.34は直線的である。口縁部に返りはなく、いわゆる蓋坏形態が逆転した後の所産であり、実際SI2からは蓋No.9も出土している。高坏は無蓋高坏とされるものであり、脚部全体を欠損しているが、その剥落面には摩滅が認められることから坏部だけで使用されていたことが窺われる。特徴としては「椀」状の器形と、体部中位に巡らされた2条の沈線が挙げられ、管見では類似例として前橋市後二子古墳の墓道出土資料、高崎市田端遺跡の寺東地区35号住居跡出土資料、太田市金山丘陵窯跡群中の八幡窯跡群における遺構外出土資料などがあるが^(註1)、細部形状や法量などをみると後二子古墳例が酷似しており、同型式の器種であった可能性が考えられる。



第24図 須恵器坏・坏蓋・高坏集成図

(3) 小結

これらの土器様相から比定される各住居跡の時期であるが、まずSI2とSI4から出土した土師器の坏群に着目してみると、SI4では坏A2および坏Bのみで構成されるのに対しSI2では全類型が揃い、かつ坏A1が主体となっていることが解る。さらに両住居跡の坏A2・坏Bをそれぞれ比較すれば、SI2の方が小型化、さらに底部の扁平化という傾向が表れており、これらが後出的であることが容易に看取されるであろう。なお、SI4の坏A2のうちNo.41はNo.40・42にみられる口縁部の微妙な外反はなく、体部との境にある外稜も曖昧であるなど、むしろ坏A1に近い特徴を備えた個体であるといえる。しかしながら坏A1はいずれも口縁部が短小で、内傾する屈曲も容易に視認できるほど極端なものとなっていることから、No.41は坏A2が坏A1へと移行する途中段階の形態と考えられる。^(註2)

次にSI2とSI3の須恵器坏を取り上げてみる。器高・器厚や体部形状に若干の相違はあるが、これらは胎土や焼成など明らかに生産地を違えるものであり、地域性も無視できない。実際にそれぞれの底部径に対する口縁部径の比率をみるとSI2-No.7で1.9倍、SI3-No.34で1.7倍と、さほど大差ない数値が導き出される。また全体の成形はともに渦巻状の粘土紐巻き上げで、底部整形も回転ヘラケズリである。こういった共通点は、むしろ両者の併行性を示していると思われる。

さて、SI4からSI2への先後関係、そしてSI2とSI3の同時性を試案したが、そこに与えられる実年代はどうか。先学の見解を参考にし、現状での検討を試みたい。^(註3)

まずSI4の土器様相は、坏A2が模倣坏からの派生品である可能性があり、さらにその中に坏A1への過渡的な個体が混在すること、さらに坏Bが典型的な模倣坏の形態を残しながらも細部では外稜の「ダレ」や、口縁部の外反傾向が強く認められる点などから、7世紀後葉の年代が考えられる。これに後出するSI2については、坏Cの存在に画期的な様相の変化が捉えられなくもないが、坏A2および坏Bの混在がなおも客体的に残存することから、大幅な時期差は想定し難いであろう。^(註4) よって7世紀末葉～8世紀初頭に比定するのが妥当と思われる。SI3も少量の資料ながらも須恵器坏の形態がSI2との同時性を示唆し、併行する年代を与え得る。ちなみに、掲載対象外とした覆土一括の土師器坏片は2点存在するが、いずれも坏A1で、形態的にもSI2の一群と類似するものであった。

最後にSI1の年代だが、坏A1に分類されるNo.4の形態はSI2のかかる一群との共通性が指摘されるものの、小片のため今一つ決定的ではない。しかし5点認められた覆土一括の土師器坏はNo.4とほぼ同形品に限られ、共伴する他の土器形態からもSI4よりは新しく位置付けられる。雑駁ではあるが、今のところSI2と併行する時期を考えておきたい。

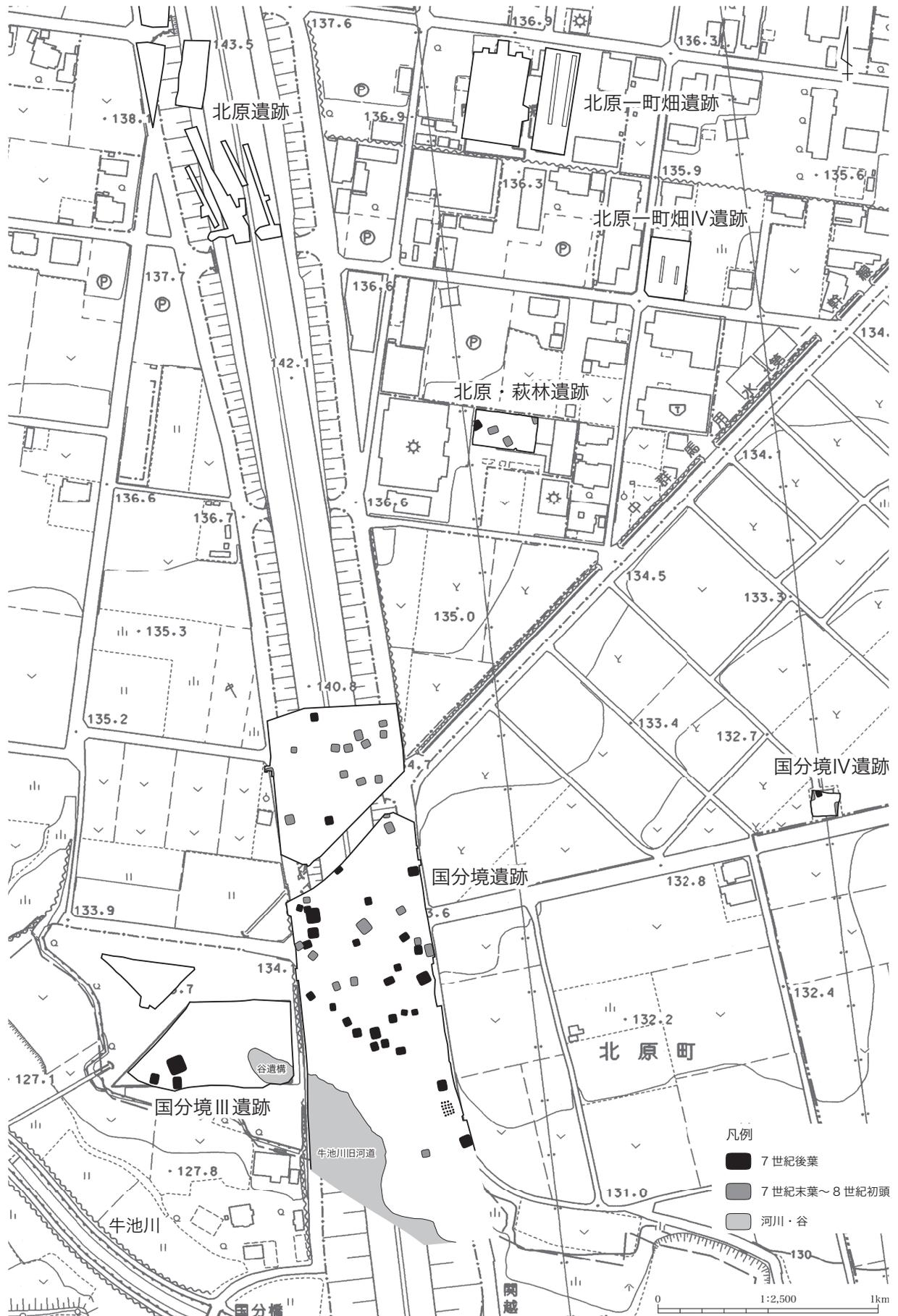
ところでSI4の高坏No.38は6世紀後葉の所産とみられるものであり、伴出住居とは1世紀近い空白が指摘される。その要因についてはこれが伝世品なのか、それとも偶然見つけた埋蔵物なのか、憶測すらできないが、脚部欠損の状態での使用は「坏部」に対し何らかの嗜好があったことを暗示し、特殊な性格の器物として当時扱われていたことを彷彿させる。この点については、次節にて再度触れてみたい。

第2節 北原・萩林遺跡の集落について

7世紀後葉～8世紀初頭に比定される4軒の住居跡は、集落の一部であることは即断できるものの、調査範囲の制約からその全体像がいかようなものかは把握できない。そこで、広面積での調査が実施された近隣の国分境遺跡および国分境Ⅲ遺跡の状況から比較してみることにする。^(註5) 両遺跡は本遺跡の南西200m前後に位置し、国分境遺跡は1981～1984（昭和56～59）年に関越自動車道新潟線の建設に伴い、面積約15,000㎡が調査された。国分境Ⅲ遺跡は国分境遺跡の西側に接し、1991（平成3）年に毎日新聞社北関東コア建設に伴って面積約3,400㎡が調査されている。これらは牛池川右岸に形成された集落遺跡であり、7世紀後葉から造営が開始され、11世紀代まで存続することが確認されている。

これら2遺跡を合計すると、7世紀後葉～8世紀初頭の堅穴住居跡は56軒が数えられる。^(註6) その分布は概ね数軒が一つの小群を構成、もしくは単独で点在するものであり、密集傾向にはない。さらに個々の小群は、一辺5mを超える大型住居跡を中核とする場合と、^(註7) 中型以下同等規模の住居跡だけで構成されるという2つの形態が存在し、配置的には前者の外縁を後者が取り巻くような状況である。また、7世紀末葉～8世紀初頭になると住居跡の分布はやや北側への偏在が窺われる。

北原・萩林遺跡の当該期集落も、これと同様の分布傾向を示すものであったと思われる。しかし国府境地区の集落が11世紀代まで存続するのに対し、当遺跡内では集落の継続的な状況を認め得ない。各住居跡の覆土一括遺物も少量で、これと大幅に時期を違える混入品はごくわずかであった。さらに西側隣接地の関越自動車道用地内においても遺構検出の報告はなく、少なくとも今回検出された住居跡が構成したとみられる小群の近辺では、比較的短期間での居住放棄が想定される。加えて北西約200m前後に位置する北原遺跡では8世紀後葉から集落形成が開始され、^(註8) さらにその北側の下東西遺跡でも8世紀前葉には集落が断続するなど、^(註9) 居住放棄後の人々が近隣地にて新たな集落を形成した痕跡は現状では認められない。



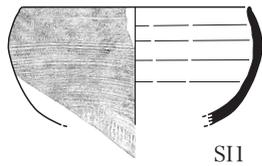
第25図 周辺の7世紀後葉～8世紀初頭の住居跡

また、今回の調査でもう一つ注目したいのが須恵器「仏鉢」・「小型短頸壺」など、仏教系遺物の出土である。これらは当遺跡の集落に、仏教文化の影響が何らかのかたちで波及していたことを物語る資料である。ちなみに仏鉢は本県では40例近くの出土が知られ、分布も県内ほぼ全域におよぶものだが、管見では8世紀から9世紀の所産が主体である。SIIの仏鉢はこれらの中でも比較的早く位置付けられると思われ、体部下半にタタキ痕を残すのも他の資料には認められない特徴である。また、周辺遺跡では下東西遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、鳥羽遺跡の3遺跡11例の出土を数えるが、このうち同時期に比定されるのは上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡の1例(A区199号住居跡)の資料のみであった。少なくとも当該期においては、その稀少性が指摘できるであろう。

このような仏教文化の影響を別の視点に置き換え、SI4の高坏を再度観察してみると、脚部欠損の状態が「佐波理鏡」(銅鏡)と良く似ているのが指摘される。もちろんこれだけの結論付けは避けるが、7世紀中葉以降は器形に金属器指向の影響を受けたとみられる土器の増加が指摘されており、仮にこのような背景の中で過去の「遺物」を仏器になぞらえ、重宝していたとすれば興味深い。現状ではその実証に至る術はないが、あ

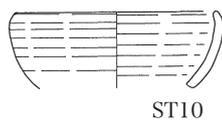
周辺遺跡「仏鉢」

北原・萩林遺跡

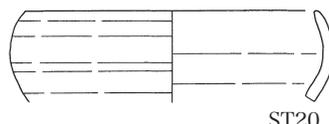


SII

下東西遺跡

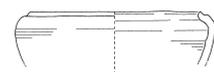


ST10



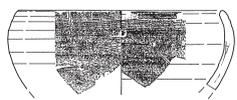
ST20

鳥羽遺跡

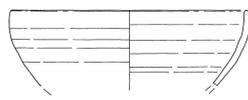


K区 173住居

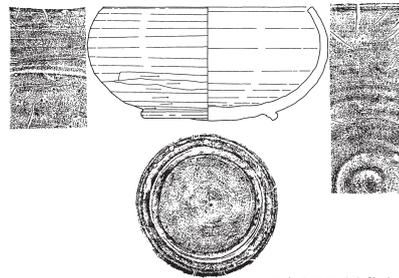
上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡



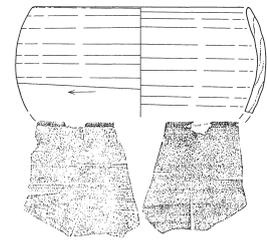
B区 73号住居



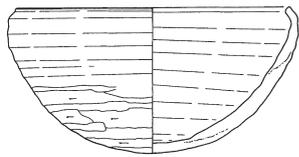
B区 91号住居



A区 199号住居



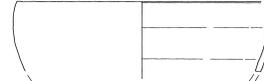
B区土坑群



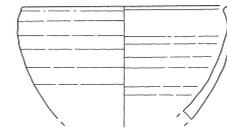
C区 9号溝



B区遺構外



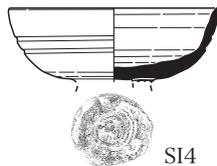
B区遺構外



I区遺構外

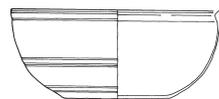
SI4 高坏・佐波理鏡

北原・萩林遺跡

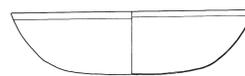


SI4

山王廃寺



寺域南方



寺域東側東門付近

第 26 図 周辺遺跡の仏鉢と佐波理鏡

くまで可能性の一つとして掲げておくことにする。

仏教文化の影響が窺える北原・萩林遺跡の集落については、南東約700mに位置する山王廃寺との関わりが無視できない。山王廃寺は本県最古の伽藍寺院とされ、その創建については7世紀第3四半期に遡る可能性が指摘されている。^(註12)今回検出されたSI1～4はこれと時期的に並行し、さらに位置的な関係など、山王廃寺との密接な関わりを示唆する点が多い。恐らくは国府境遺跡をはじめとする集落とともに、直接寺院の創建、さらには運営に携わるような人々が居住する集落であったと考えられる。

なお、当遺跡から山王廃寺に至る間では国分境II遺跡、同IV遺跡の調査が行われているが、いずれも市道^(註13)拡幅や鉄塔工事といった「線」あるいは「点」状の範囲における実施である。また、一部の調査などから少なくとも集落の広がり^(註14)が西側50m・北側100m前後の範囲内で終息することが想定されるが、未獲得の情報は山積みであるといえる。山王廃寺至近の状況も含み、こういった寺院外縁集落の諸相が、今後の調査で解明される日を待つこととしたい。

註)

1. 後二子古墳出土資料については文献21、田端遺跡出土資料については文献7、八幡窯跡群出土資料については文献29をそれぞれ参照した。
2. 実際に桜岡正信氏は、文献16の中で同様の見解を述べている。ただし、氏は坏A2を模倣坏からの自然な器形変化から成立するとは考え難いとしており、仮に模倣坏の系譜を引いているとしても器形に対する意識の転換を両者の間に想定している。
3. 編年については文献2および文献16のほか、文献4・6・8・10・13・28の各遺跡内での分析結果を参考にした。当遺跡の土器群はそれぞれの文献に従えば、下記の通りの区分に類似する個体が含まれるものである。なお、区分の表示は各報告書に倣った。

文献2：第I～III段階(7世紀第3四半期～8世紀第1四半期)	文献4：第I～III段階(7世紀第2四半期～8世紀第1四半期)
文献6：第8～10段階(～8世紀第1四半期)	文献8：III～IV期(7世紀後半～8世紀前半)
文献10：第II～III段階(7世紀後半～8世紀前半)	文献13：～第I段階(7世紀代～7世紀末葉)
文献16：II～III段階(7世紀後半～8世紀前半)	文献28：3～4期(7世紀後半～8世紀第1四半期)

なお、各文献の年代観にはこのように微妙な咀嚼があるため、筆者が独自に再整理した年代を本書に提示している。
4. SI2のNo.20は残存1/5程の破片資料である。しかしSI2の覆土遺物はいずれも床面近くの層から出土しており、さらに接合関係はないものの同一個体とみられる破片も若干含まれていたことから、直接共存する遺物として扱った。
5. 文献12および文献22参照。
6. この数は各報告書の記録を再整理し、新たに抽出したものである。その年代観は註3の作業で導き出された結果に基づいている。
7. 各遺跡で当該期に比定される一辺5m超の大型住居跡は下記の通りである。※()内は長軸×短軸m
国分境遺跡：A区2号住居跡(5.3×5.3)、B区15号住居跡(5.3×5.2)・21号住居跡(5.65×不明)・46号住居跡(6.2×5.4m)、C区29号住居跡(6.7×6.65)の計5軒。国分境III遺跡：H-6(7.8×7.7)の1軒。これをみると、H-6が極端に大規模であることが解る。
8. 文献1。8世紀後葉の住居跡は6軒が検出されたにすぎない。
9. 文献4。7世紀代に関しては北原・萩林遺跡の住居跡と併行する部分もあるが、それ以降は8世紀第3四半期に至るまでの空白期がある。
10. 文献27を参照したが、これはあくまで1999(平成11)年の調査時の数であり、それ以外に筆者が独自に数えたものも含まれる。しかし県内全例の認識に至るものではなく、概算的なものでしかないことを予め断っておきたい。
11. 文献25。特に須恵器に関しては7世紀中葉以降、金属器に器形をなぞらえた器種が増えることが指摘されているが、その成因については直接の模倣でなくある一定の隔たりを有することが指摘されている。
12. 文献26の編年観による。
13. 文献15および23。特に文献15では開発予定地25,800㎡に対し、調査対象となったのはわずか20㎡に過ぎない。この点について、後世の耕作による削平の進行が遺構の消失に繋がったものと報告書中で示唆されている。
14. 北原村東遺跡(平成7年度分)、北原村東遺跡(平成15年度分)、北原一町畑遺跡、北原一町畑IV遺跡の調査例などの照合による。堅穴住居跡は当遺跡の北東約300mに位置する北原村東遺跡(平成15年度分)で1軒が検出されているのみであり、時期も8世紀前半に比定されている。

主要参考文献(発行年順)

1. 群馬町教育委員会 『北原遺跡』, 1986 (昭和61)年
2. 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」群馬県史編さん委員会『群馬県史研究』24, 1986 (昭和61)年
3. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡 G・H・I 区』, 1986 (昭和61)年
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『下東西遺跡』, 1987 (昭和62)年
5. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』, 1987 (昭和62)年
6. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡 I・J・K 区』, 1988 (昭和63)年
7. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『田端遺跡』, 1988 (昭和63)年
8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』, 1988 (昭和63)年
9. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』, 1989 (平成元年)
10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』, 1990 (平成2)年
11. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡 L・M・N・O 区』, 1990 (平成2)年
12. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『国分境遺跡』, 1990 (平成2)年
13. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『熊野堂遺跡(2)』, 1991 (平成3)年
14. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』, 1991 (平成3)年
15. 前橋市教育委員会 『国分境Ⅱ遺跡』, 1991 (平成3)年
16. 桜岡正信「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について」群馬土器観会『群馬考古学手帳』Vol.2, 1991 (平成3)年
17. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(6)』, 1992 (平成4)年
18. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)』, 1992 (平成4)年
19. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(8)』, 1992 (平成4)年
20. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F 区』, 1992 (平成4)年
21. 前橋市教育委員会 『後二子古墳・小二子古墳』1992 (平成4)年
22. 群馬町教育委員会 『国分境Ⅲ遺跡』, 1993 (平成5)年
23. 群馬町教育委員会 『国分境Ⅳ遺跡』, 1998 (平成10)年
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『下東西清水上遺跡』, 1998 (平成10)年
25. 桜岡正信・神谷佳明「金属器模倣と金属器指向」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『研究紀要』15, 1998 (平成10)年
26. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 『山王廃寺～山王廃寺Ⅴ遺跡発掘調査報告書～』2000 (平成12)年
27. 考古学から古代を考える会 『古代仏教系遺物集成・関東』2000 (平成12)年
28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『高井桃ノ木Ⅲ遺跡・総集編』, 2006 (平成18)年
29. 駒澤大学考古学研究室 『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅰ』, 2007 (平成19)年

写真図版



調査前現況（西から）



調査区遠景（南西から）



調査区全景（垂直・上が北）



基本土層 A（東から）



基本土層 B（北から）



S11 床面 全景 (南西から)



S11 掘り方 全景 (南西から)



S12 床面 全景 (南西から)



S12 西～南部 遺物出土状況 (北西から)



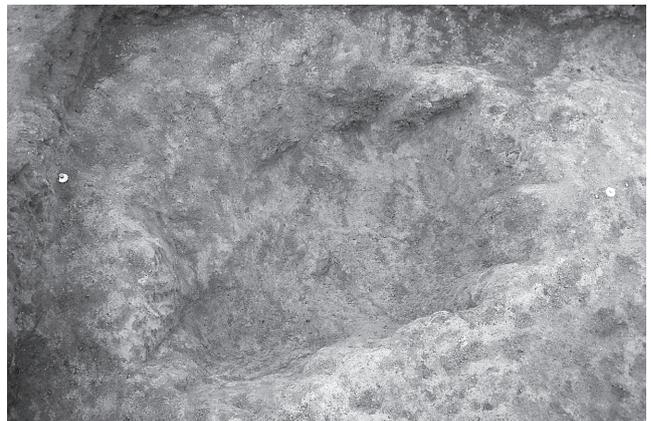
S12 カマド 遺物出土状況 (南東から)



S12 カマド 全景 (南西から)



S12 カマド 断ち割り状況 (南西から)



S12 P1 全景 (南西から)



SI2 P2 全景 (南西から)



SI2 P3 全景 (北西から)



SI2 P4 全景 (北西から)



SI2 掘り方 全景 (南西から)



SI3 床面 全景 (南西から)



SI3 カマド 全景 (南西から)



SI3 P2 全景 (南東から)



SI3 掘り方 全景 (南西から)



SI4 遺物出土状況 全景 (南東から)



SI4 南西部 遺物出土状況 (北から)



SI4 遺物No. 38 出土状況 (北東から)



SI4 カマド 遺物出土状況 (南東から)



SI4 床面 全景 (南西から)



SI4 カマド 全景 (南西から)



SI4 P4 全景 (北東から)



SI4 掘り方 全景 (南西から)



SK1 全景 (西から)



SK2 全景 (北東から)



SK3 全景 (南東から)



SK4 全景 (南東から)



SK5 全景 (東から)



SK6 全景 (東から)



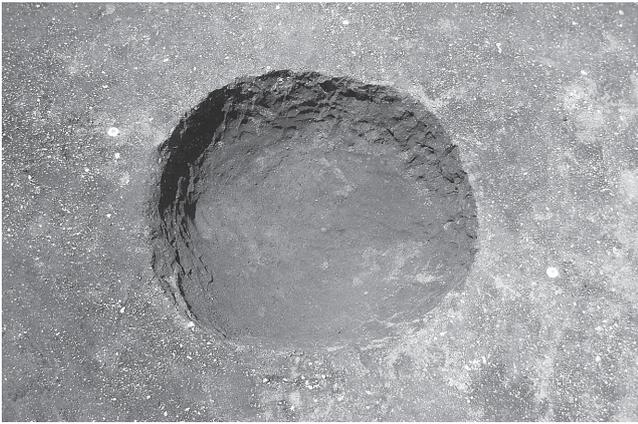
SK7 全景 (南から)



SK8 全景 (南から)



SK9 全景 (南から)



SK10 全景 (東から)



SD1 全景 (西から)



Pit1 全景 (西から)



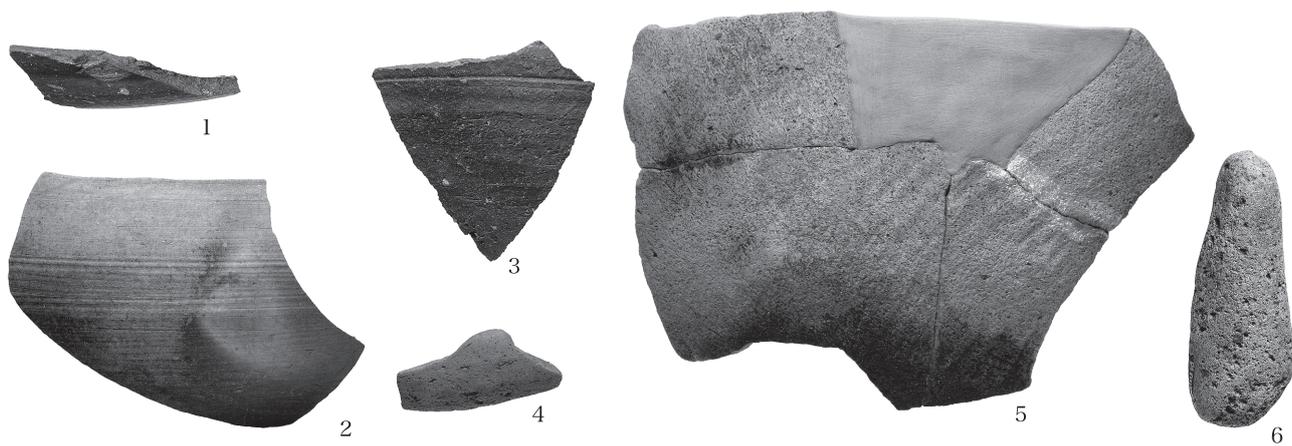
Pit2 全景 (東から)



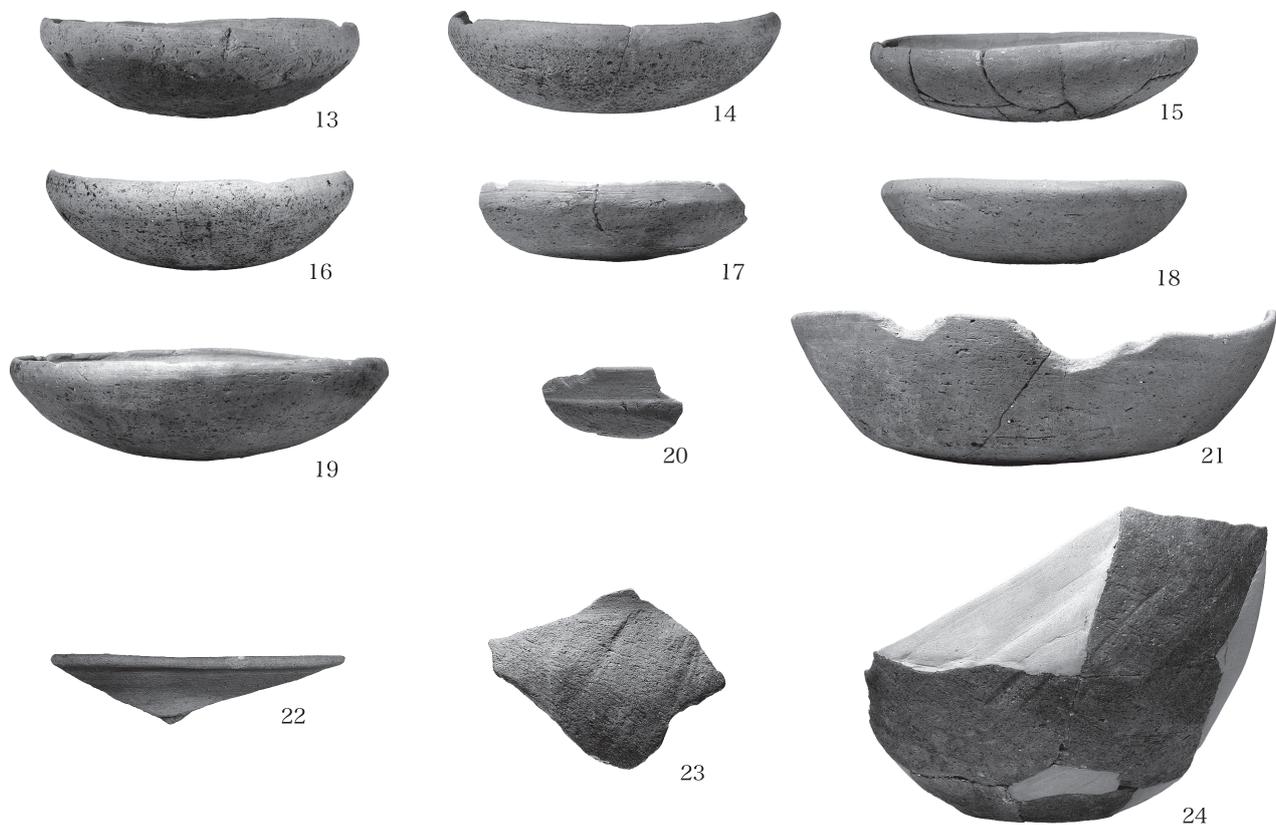
Pit3 全景 (南東から)



Pit4 全景 (北から)



SII 出土遺物



SI2 出土遺物 (1)



25



26



27



28



29



30



31



32



33 (S=1/4)

SI2 出土遺物 (2)



34



35



36



37

SI3 出土遺物



38



39



40

SI4 出土遺物 (1)



41



42



43



44



45



46



47



48

SI4 出土遺物 (2)



49



50



51

SK2 出土遺物

遺構外出土遺物

報告書抄録

フリガナ	キタハラ・ハギバヤシイセキ
書名	北原・萩林遺跡
副書名	介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 291 集
編著者名	吉澤 学
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒 370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井 311-1
発行年月日	2012 年 1 月 31 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
キタハラ・ハギバヤシイセキ 北原・萩林遺跡	タカサキシキタハラチョウ 高崎市北原町 アザハギバヤシ169-2バンチホカ 字萩林169-2番地他	102024	516	36°24'16"	139°01'30"	2011.7.11 ～ 2011.8.18	約 290㎡	介護施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北原・萩林遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡 4 軒	土師器・須恵器 編み物石・台石	7 世紀後～8 世紀初 「仏鉢」出土
		古墳時代～古代	土坑 10 基	土師器	
			溝跡 1 条		
			ピット 4 基	須恵器	
要 約	高崎市北東端部、前橋市との境界付近に位置する集落遺跡で、南側を牛池川、北側を八幡川に挟まれた台地先端付近に立地する。検出された竪穴住居跡は 4 軒を数え、時期は 7 世紀後葉が 1 軒、ほかは 7 世紀末葉～8 世紀初頭に比定される。出土遺物の中には「仏鉢」や小型短頸壺といった仏教系遺物が含まれ、南東約 700 m 程に位置する山王廃寺（7 世紀第 3 四半期の創建と推定）との密接な関わりが想定される。				

北原・萩林遺跡

— 介護施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成 24 年 1 月 30 日 印刷

平成 24 年 1 月 31 日 発行

発行／医療法人関越中央病院

株式会社シン技術コンサル

高崎市教育委員会

印刷／細谷印刷株式会社